

60392

教科書文庫

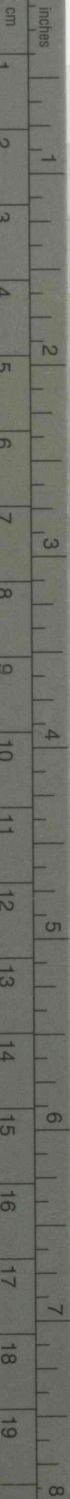
6
810
34-1949
20000 67130

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black



3a
810
BB24

教科書

國語

第三学年

下



資料室

國語

第三学年

下



3a
810
ABZP



十一	うさぎさん.....百二十一
十	たこ.....百十四
	(三)
	(二)
九	ぼくの発見.....九十九
八	つりばりのゆくえ.....八十
七	だれの力.....七十
六	かべ新聞.....五十六



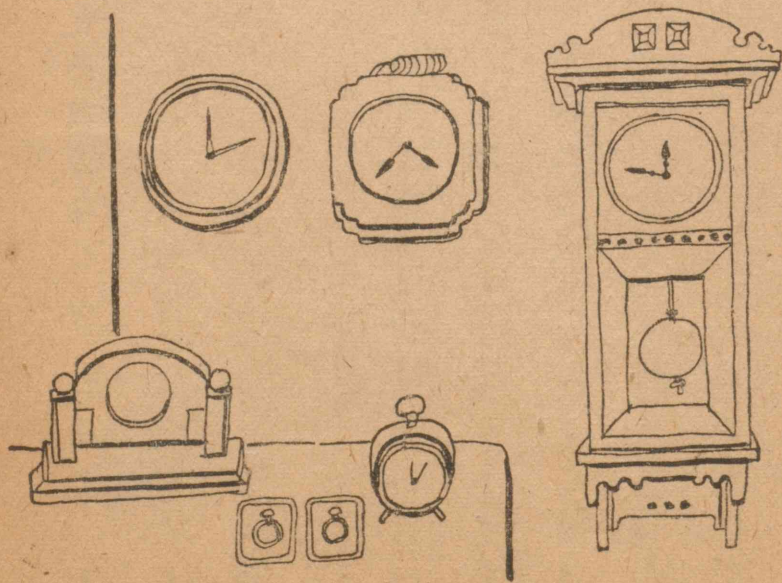
	もくろく
一	小さなねじ.....四
二	イソップものがたり.....十三
	ありとはと
	ありときりぎりす
三	かかし.....三十一
四	空のうた.....四十六
五	月と雲.....五十一



一 小さなねじ

くらいはこの中にしまいこまれていた、小さな鉄のねじが、ふいにピンセットにはさまれて、明かるいところへだされた。ねじは、おどろいてあたりをみまわしたが、いろいろな音や、みたこともないような物が、ごたごたと耳にはいり、目にはいるばかりで、なにがなにやら、さっぱりわからなかった。しかし、だんだんおちついてみると、ここは時計屋の店であることがわかった。自分のおかれているのは、しごと台の上ののっている小さなふたガラスの中で、そばには小さなし

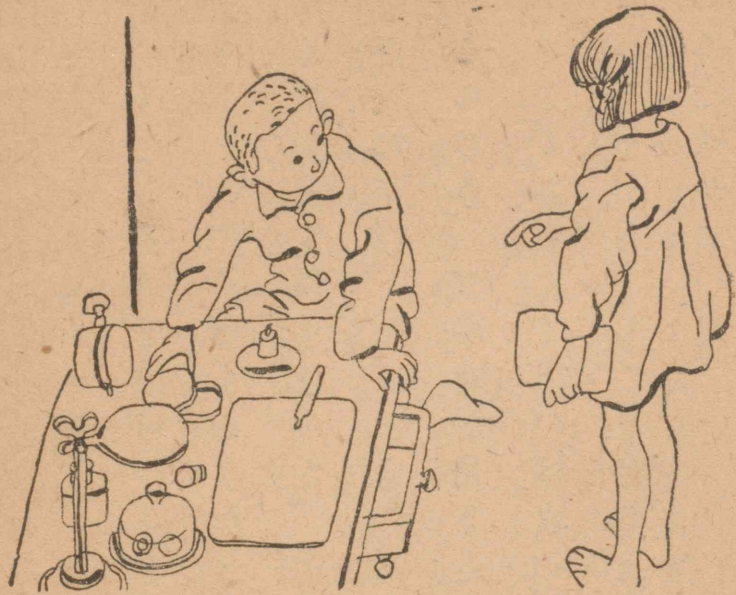
んぼうや、は車や、ぜんまいなどがならんでいる。きりや、ねじまわしや、ピンセットや、小さなつちや、さまざまの道具も、おなじ台の上によこたわっている。まわりのかべやガラス戸だには、いろいろな時計がたくさんならんでいる。カチカチと氣ぜわしいのはおき時計で、カッターカッターとおうようなのははしら



時計である。

ねじは、これらの道具や時計をあれこれとみくらべて、あれはなんの役にたつのだらう、これはどんなところにおかれるのだらうなどと考えているうちに、ふと、自分のことに考えおよんだ。

「なんという小さい、なさけない自分であらう。あのいろいろな道具、たくさん時計、それらはかたちも大きさもそれぞれちがってはいるが、どれをみても大きくてえらそうである。ひとかどの役目をつとめて、世の中の役にたつのに、どれもこれも不足はなさそうである。ただ自分だけがこのように小さくて、なんの役にもたちそうにない。ああ、



なんというなさけない身のうえであらう。」
ふいにバタバタと足音がして、小さな子どもがふたり、おくからかけだしてきた。男の子と女の子である。ふたりはそこらを見まわしていたが、男の子は、やがてしごと台の上のものをあれこれといじりはじめた。女の子はただじっとみつめていたが、やがてこ

の小さなねじをみつけて、

「まあ、かわいいねじ。」

というど、男の子はゆびさきでそれをつまもうとしたが、あまり小さいのでつまめなかった。やっどつまんだと思うと、すぐにおどしてしまった。子どもたちは思わずかおをみあわせた。ねじは、しごと台のあしのかげにころがっていった。

このとき、父の時計屋さんがはいつてきた。時計屋さんは、「ここであそんではいけない。」

といいながら、しごと台の上をみて、だしておいたねじのないのに気がついた。

「ねじがない。だれだ、しごと台の上をかきまわしたのは。」

ああいうねじはもうなくなって、あれ一つしかないのだ。

あれがないと、町長さんのかいちゅう時計がなおせない。

さがせ、さがせ。」

ねじはこれをきいて、とびあがるほどうれしかった。「それでは、自分のようなものでも、役にたつことがあるのかしら。」と喜んだが、「こんなところにくろげおちてしまつて、もし、みつからなかったら。」と、それがまた心配になつてきた。

親子はそうがかりてさがしはじめた。ねじは、

「ここにいます。」

とさけびたくてたまらない。三人はさんざんさがしまわつたが、みつからないのでがっかりした。ねじもがっかりした。



そのとき、いままで雲にか
くれていたたいようがかおを
だしたので、日光が店いっば
いにさしこんできた。すると、
ねじがその光を受けて、ピカ
リと光った。しごと台のそば
で、ふさぎこんで下をみつめ
ていた女の子が、思わず「あっ。
とさげんだ。時計屋さんも喜
んだ。しかし、いちばん喜ん
だのはねじであつた。

時計屋さんには、さっそくピンセットでねじをはさみあげて
だいじにもとのふたガラスの中へ入れた。そうして、一つの
かいちゅう時計をだしてそれをいじっていたが、やがて、ピ
ンセットでねじをはさんで、きかひのあなにさしこみ、小さ
なねじまわしてしつかりとどめた。
りゅうずをまわすと、いままで死んだようになっていたか
いちゅう時計が、たちまち、ゆかいそうにカチカチと音をた
てはじめた。ねじは、自分がここにはいったために、この時
計ぜんたいが、ふたたび活動することができたのだと思うと、
うれしくてたまらなかつた。時計屋さんは、しあげた時計を
ちよつと耳にあててから、ガラス戸だなの中につりさげた。

一日おいて、町長さんがきた。

「時計はなおりましたか。」

「なおりました。小さなねじ

が一本いたんでいましたか

ら、とりかえておきました。

ぐあいのわるかったのは、

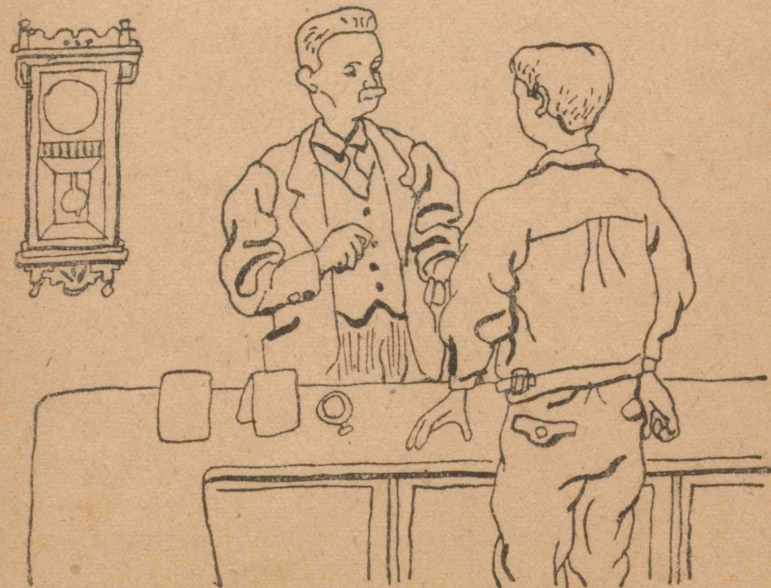
そのためでした。」

と、いってわたした。ねじは、

「自分もほんとうに役にたっ

ているのだ。」

と、心からまんぞくした。



二 イソップものがたり

ありとはと

一ぴきのありがいました。あついで日中の道を、ものを運び

ながら歩いてくると、のどがかわきました。

ちやうど、そばに小川が流れていました。

ありは、川の岸で、うつむいて水をのもうとしました。も

うすこして口が水にとどきそうになったとき、足がつるりと

すべって、「あっ。」というまに、川の中におちてしまいました。

「助けて、助けて。」

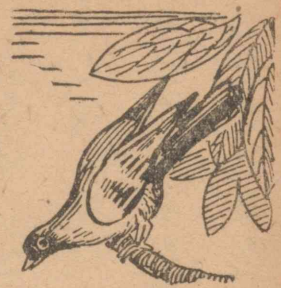
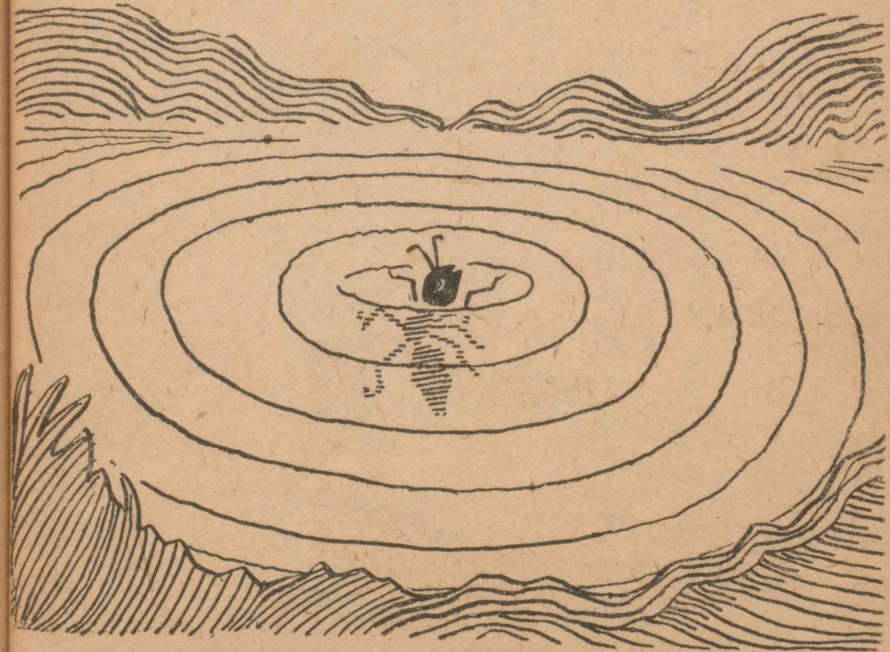
ありは大きな声をだしてさ
げびました。けれども、だれ
もきてはくれません。

「助けて、助けて。」

ありは、いっしょうけんめ
いにさげびつづけました。

それを一わのはとがみつけ
ました。はとは、いそいで木
の葉をとって、ありのそばに
おとしてやりました。

木の葉は船のようになって、



ありのそばを流れました。

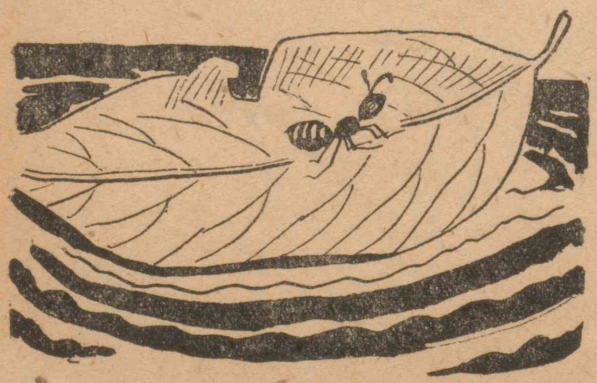
「ありがたい。」

ありはそういって、すぐ木の葉の船につか
まりました。そうして

その上に乗りました。

木の葉の船は波に流されて、川の岸
につきましたので、ありは、ぶじに岸
にあがることができました。

「ああ、助かった。もし、あの木の葉
の船が流れてこなかったら、どうなっ
ていたかしのれない。」



ありは、心から木の葉におれいをいいました。

そのとき、ありのまえをひとりのかりうどがゆみやを持って通りました。

そのかりうどは、きゆうに歩くのをやめて、ゆみにやをつがえて、木の上をねらいました。

木の上には、一わのはどがとまっていたいました。はどは、ねらわれていることを知らずにいました。

ありは、いそいでかりうどのすねにはいのぼりしました。そうして、カいっぱいくいつきました。小さなありでも、カまかせにかんだので、かりうどもびっくりして、

「あいたたた。」

と、大きな声をたてました。

その声をきいて、はどが下の方をみますと、かりうどがやをつがえているではありませんか。

「あぶないところだった。」

と、いって、大いそぎで木からとびたっていきました。

ありときりぎりす

一のばめん

まくがあくと、きりぎりすが大ぜいあつまって、音楽会をし

ています。あるきりぎりすはバイオリンをひいています。あ
るきりぎりすはチェロをひいています。あるきりぎりすはふ
えをふいています。そのほか、ハーモニカをふいているもの、
オルガンをひいているもの、たいこをたたいているもの、シ
ロフォンをたたいているもの、そのうしろに合唱隊がならん
で、うたをうたっています。まん中に、しきしゃがタクトを
いっしんにふっています。しばらく音楽がつづいてから終り
ます。

しきしゃ 「上でき。上でき。」

と、さもまんぞくそうにしき台をおりてきて、あせをふきま
す。

バイオリンの
きりぎりす

「なかなかよくあったね。」

チェロの
きりぎりす

「ほんとうにいい氣持だ。」

たいこの
きりぎりす

「こんなによくあうと、た
いこのうちがいもあるよ。

じつにゆかいだ。」

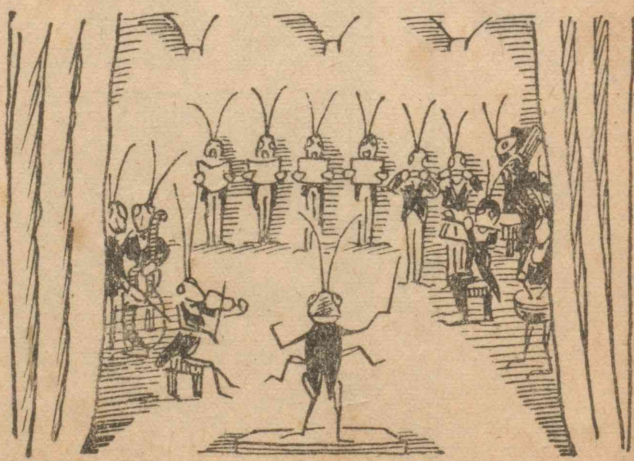
オルガンの
きりぎりす

「みどりの木の葉は喜びに
みち、きよらかな風は、

われわれの音楽をほめて
くれる。」

ふえの
きりぎりす

「たいへんきれいなもんくをいいましたね。こんな樂
しいときは、二どとありませんね。」



しきしゃ 「おいしいにうたい、おいしいにひいて、この夏の日を樂
しもうてはないか。」

うたをうたう
きりぎりす

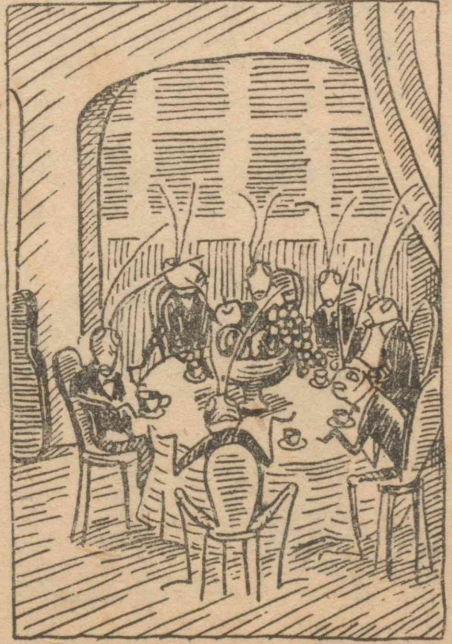
「そのとおり、そのと
おり。」

シロフオンの
きりぎりす

「さあ、ひと休みしよ
うではありませんか。」

みんな 「そうしよう、そうし
よう。」

テーブルのまわりにあつまつ
て、まるくなります。テーブルには、お茶が用意してあり、
くだものが、たくさんおさらにもってあります。みんな、樂



しそうにそれをたべます。

オルガンの
きりぎりす

「美しいぶどうに、かがやくりんご、楽しいわれら
きりぎりすの生活——」

こんなことばをみんな喜んできい
ています。

そのとき、しもてから、ありが三

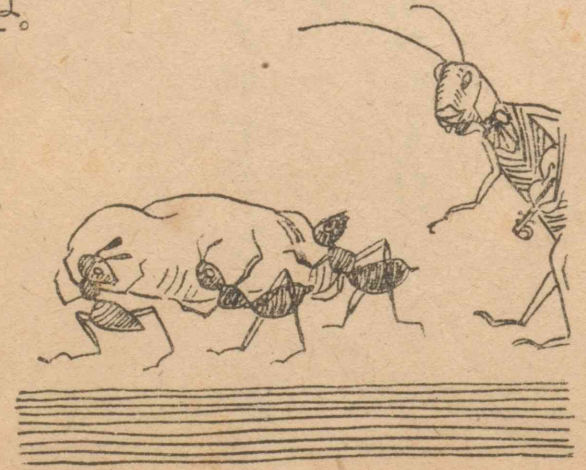
びき、ゆつくりできてきます。

大きな荷物を、力をあわせて運ん
できます。

たいこの
きりぎりす

パイオリンの
きりぎりす

「おやおや、ありさんがきたよ。
大きな荷物だな。」



チコロの
きりぎりす 「ありさん、ありさん。」

よばれても、ありたちは気がつきません。

シロフオンの
きりぎりす 「ありさんったら、ありさん。」

ありたちははじめて気がついて、

あり一 「あ、だれかと思ったら、きりぎりすさんでしたか。」

あり二、三 「きりぎりすさん、こんにちは。」

シロフオンの
きりぎりす 「こんにちは。きみたち、どこへいくの。」

ハーモニカの
きりぎりす 「そんな大きな物を持ってさ。」

あり三 「うちへ帰るところなんです。」

バイオリンの
きりぎりす 「ここでいっしょに音楽会をやるうじゃないか。」

あり二、三 「」

チェロの
きりぎりす 「いいだろう。いまあそばないで、いつあそぼうとい

うのさ。わるいことはいわない。さあ、はいりたま

え。」

あり二 「でも。」

シロフオンの
きりぎりす 「シロフオンをひとたたきたたいて、どうだい。いい

じゃないか。」

バイオリンの
きりぎりす 「バイオリンをちよつとひいて、いい音だろう。きれ

いな音だろう。」

たいこの
きりぎりす 「たいこをドンドンとたたいて、ぼくがひょうしをとつ

てあげる。ここで楽しくあそんでおいて。」

あり一 「せっかくですが、わたしたちはみんな、はたらくや

チェロの
きりぎりす

くそくをしているのです。

「はたらくやくそくだって。まあいいや、こんないい
ときにあそばないで、いつあそぼうというんだね。
楽しむために生きているんじゃないか。」

あり三

「でも、わたしたちは、はたらけるときにはたらくの
ですよ。さあ、おそくなるからでかけよう。」

と、いって、あり一、二をさそい、大きな荷物を、「一、二の三。」
と、かけ声をかけて持ちあげます。

しきしやの
きりぎりす

「苦勞しよのありさんたちだな。」

バイオリンの
きりぎりす

「こんな楽しさも知らないで、氣のどくなありさんた
ちだよ。」

オルガンの
きりぎりす

「小さなからだに大きな荷物。荷物がありが、ありが
荷物か。」

みんな 「ははははあ。」

ありはなんにもいわないで、おもい足どりで見つめてにさって
いきます。

しきしや

「われわれは、おおいにうたおう。」

シロフオンの
きりぎりす

「うたおう、うたおう。」

オルガンの
きりぎりす

「楽しみはいよいよくわわり、喜びはさらにたかまる。」

みんなにぎやかに音楽をはじめます。

二のばめん

かみて半分はありのいえの中、しもて半分はそとになってい
ます。雪がちらちら降っていて、夕ぐれに近いころ。

あり一 まどからそとをみて、「雪が降ってきた。」

あり二 「今夜はつもるかもしれない。」

あり三 「風がでてこなければいいね。ふぶきはいやだから。」

あり一 「さ そろそろ夕ごはんにしようか。」

あり二、三 「そうしよう。」

あり一は、ろの火を赤くもえたたせます。

あり二、三 「ああ、あたたかい、あたたかい。」

あり一 「夏のあいだに、こんなにたきぎをあつめておいて、
よかったね。」



あり二 「ほんとうだ。でも、夏のころはあつくてたいへんだっ
た。」

あり三 「毎日あせだくだったね。」

あり一 「そのおかげでさ、いまこう

してあたたまることもでき

るし、たべものもじゅうぶ

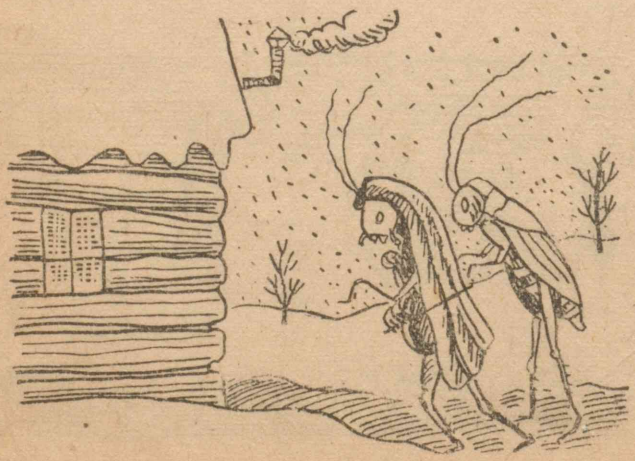
んたべられるというわけだ。」

あり三 「はたらかないものには、こ

の楽しさ、この喜びはあじ

わえないだろう。」

あり二 「たしかにそうだ。」



このとき、戸のそとに、きりぎりすが二ひきたずねてきます。ぼうしもかぶらず、がいどうもきていません。

きりぎりす一 「まあ、おねがいしてみよう。」

きりぎりす二 「ふたりでたのめば、なんどかなるだろう。」

きりぎりす一が、戸をトントンとたたきます。

あり三 「おや、だれかたずねてきたらしい。」

あり一、ニが戸の方をみています。

あり三 「おはいり。」

戸をあけて、きりぎりす一、ニがはいってきます。

あり三 「きりぎりすさんじゃないか。」

きりぎりす二 「ていねいにおじぎをしながら、「しばらくでしたね。」

あり一 「お元気ですか。」

きりぎりす一 「お元気どころか、このどおりすっかりよわって。」

きりぎりす二 「なにかめぐんでください。」

きりぎりす一 「すこしでもいいから、わけてください。」

あり二、三 「」

きりぎりす一、二 「どうかたのみます。」



あり一 「どうしよう。」

あり二 「かわいいそうだね。」

あり三 「花のみつをわけてあげよう。」

あり一が、おくの方からみつをびんにいれてもってきてます。

それをきりぎりすにわたします。

きりぎりす 一 「ありがとうございます。」

二 「ありがとうございます。」
なんどもお礼をいってたちさります。雪がたくさん降ってきます。

まく

三 かかし

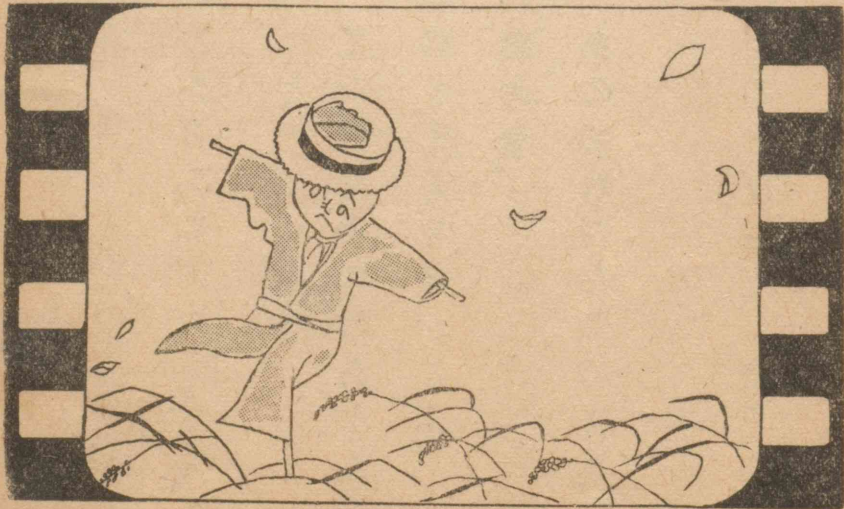
これは、まんがの
シナリオです。

1 はげしい風。いねが波の
ようにゆれる。

2 かかしが、「へのへのもへ」
の顔で、風に向かって立っ
ている。きものすそが

風にあおられる。

3 雲がちぎれてどぶ。



4 木が大ゆれにゆれる。木の葉がとぶ。

5 かかしのまゆがまっすぐにのびる。目だまの「の」字がくるくるまわる。口の「へ」の字がのびたりちぢんだりする。

6 「これぐらいの風にまけるものか。」

7 かかしの顔に葉がとびかかる。てっぺんのぬけたかんかんぼうしがふきとばされる。顔のうしろを雲がとぶ。

8 いねが大きく波うつ。はげしい風の音。

9 かかしが風にまきあげられる。糸の切れたたこのように、空にすいこまれていくかかし。

10 からすの子が、びっくりしてすからとびだし、空をみあげる。

11

おかあさんがらすが、はねをさか立てて、子からすをす

にひきもどす。

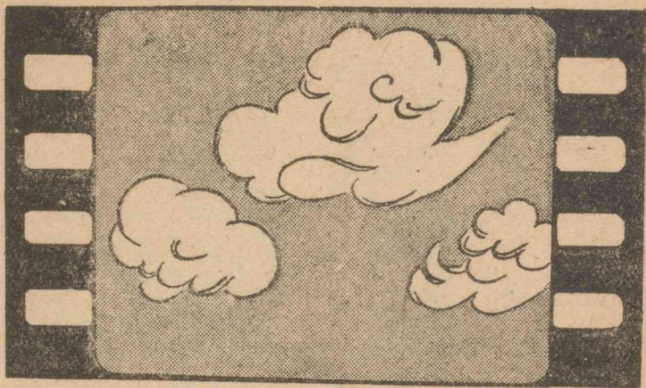
12 白いひげの雲が風に流されてい

13 風を受けるたびに雲のからだのかっこうがかわる。

雲 「おや、かかしくんじゃ
ないか。」

かかし 「助けて——雲のおじさん。」

かかし 「ああ、おどろいた。生まれてはじめての大風だ。雲のおじさん、わたしのたんばはどこでしょう。」



雲

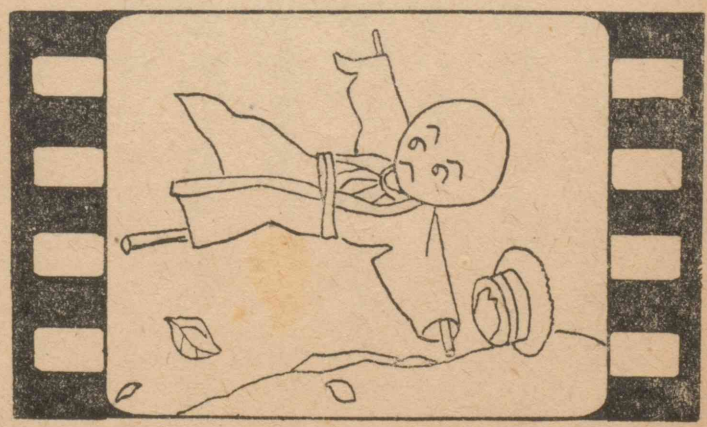
「山のかげにかくれて、こ
こからはみえないよ。」

14

風がふく。雲のひげがあおら
れて長くのびる。かかし、一
どりはねあげられるが、もん
どりうって、また、ひげの中
におちる。

15

かかしの目だま、ぐるぐるま
わりながら、大きくなったり、
小さくなったりする。口をもぐもぐさせている——声が
でないのである。



雲

「だいじょうぶかい。」
かかし「なんてらんぼうな風なんだらう。おじさん、大風つ
てこわいな。」

雲

「ないだりあれたり、海みた
いなものさ。ほう、また、
すごいのがくるぞ。」

16

また、風。かかしのつかまった
ひげ、のびるだけのびてちぎれ
てしまう。

17

くるくるまいながらおちていく
かかし。



18 大すぎの上にやっとどまったかかし。

かかし「すぎの木のおばさん、助けて。」

すぎ「あら、子どものかかしだね。かわいそうに。根の方へおりていらっしやい——ああ、またふいてくるよ。

早く、早く、あっ。

19 おれるようにあたまを地につけるすぎの木。はげしい風の音。

20 高くふきあげられて、空にきえていくかかし——点になって、おしまいはみえなくなってしまふ。

21 風の音がよくなる。それにつれて、空がうす赤くなってくる。夕やけ雲がうかんでいる。

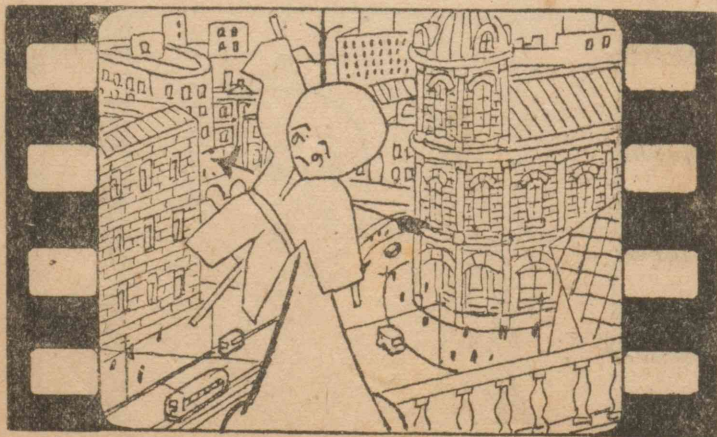
22 ビルディングが立ちならんでいる町。ラジオの音楽。

23 そのビルディングの一つ——どがった屋根にひっかかっているかかし。

24 顔の大写し。「の」の字のはねたさきから、雨だれのようななみだがこぼれおちる。はなが動く。

口が動く。

25 ずっと下にみえる夕やけの大通りを、まめつぶほどの自動車や電車が、ひっきりなしにゆききしている。



26

立ちならぶビルディングのあいだから、とびあがってくる親子のつばめ。

27

子つばめがかかしをみつげる。

子つばめ「おかあさん、なんてしょ

う。あの屋根にとまっ

ているのは。」

親つばめ「さあ——」

28

親子のつばめ、屋根のそばを通りぬけ、また、もどってきてか

かしの近くにどまる。

親つばめ「まあまあ、かかしさんです。ね。どうしたの、いっ

たい。」

かかし「ふきとばされたんです。きょうの大風に。」

子つばめ「へえ。きみ、どこにいたの。」

かかし「あの山のかげの、ずっと遠いたんぼだけど、ぼ

く、もう帰れないんだ。なみだをほろほろこぼ

す。

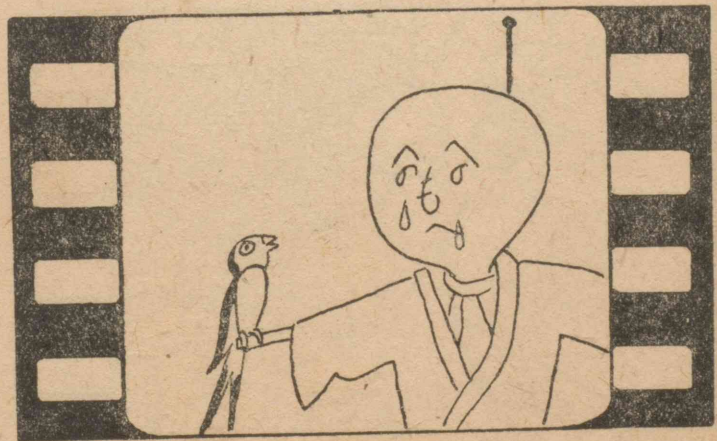
親つばめ「でも、村に帰らなくちゃ。あなたのしごとはこ

れからよ。わたしたちのなかまがわるい虫をどっ

てそだてたいねを、こんどは、あなたがたがま

もるんですもの。」

かかし「そりゃそうだけど——」





親つばめ 「ああ、いい考えがある。心配しないでまっ
らっしゃい。すぐ帰ってきますから。」

29 親つばめ、子つばめをつれてさる。

30 のこされたかかしの大写真し。

かかし 「帰るといったって、あんな遠いところ——でも、
もう一どあの村に帰りたいなあ。」

31 かかしのまわりに、村の子どもや、森や、小川や、いな
田などの、きれいな、楽しかった思い出が、うかんで
きえていく。

32 日がくれかかる。夕やけがばら色にこくなる。かかしの
顔まで赤くなる。

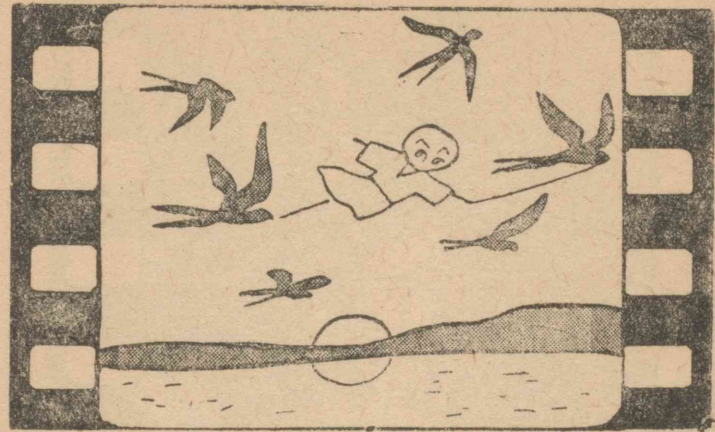
33 ビルディングのまどに、一つ二つと火がつく。

34 ビルディングのあいだから、つ
むじ風のように、列をつくった
つばめのむれが、かかしの方へ
とんでくる。

35 親つばめと子つばめが、かかし
のそばにとまる。

親つばめ 「さあ、かかしさん、い
まから帰るのよ、
子つばめ 「みんなできみをおんぶ
するんだ。」

かかし「みなさんで。」



親つばめ「南へひきあげるついで

だから、えんりよしな

くてもいいのよ。さあ、

みなさん、日がくれき

らないうちにおねがい

します。」

36

つばめのむれ、屋根の上にひと

かたまりになる。それがほぐれ

て、一列にビルディングをはな

れる。かかしが列のまん中にはいつている。

37

しずんでいくお日さまをおって、町の上を列車のように

38

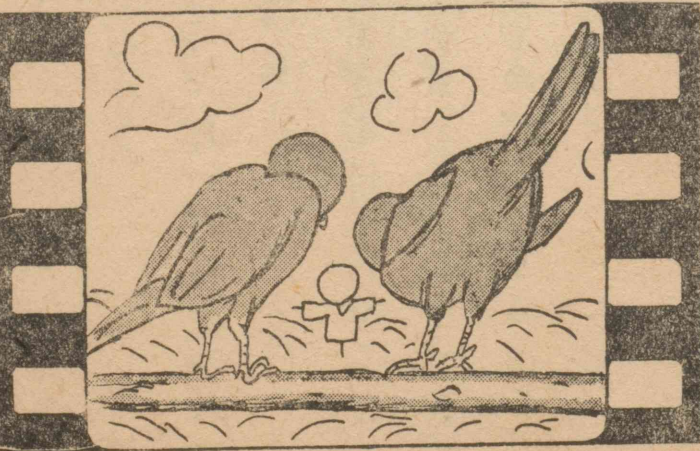
山や、みずうみや、はたけの上
をひとかたまりになってとぶつ
ばめのむれ。

39

その列が空にすいこまれていく。
それをつつむようにして日がく
れる。美しい空の色。

40

青黒い夜空に大きな三日月さま。
にわとりの声。さわやかな朝の
空。白い雲。



木のえだにとまっている二わの子がらす。

子がらす一

「ほら、みてごらんよ。ほんとうにあのか
かしが帰っているだろう。」

子がらす二

「うん——だけど、いったいだれがつれて
帰ったんだろうね。」

子がらす一

「おとうさんやおかあさんにもわからない
んだって——ぼくが目をさましたときに
は、おびみしたいなものが向こうの山の方
へとんでいったんだよ。」

子がらす二

「なんだろうな、それ。」

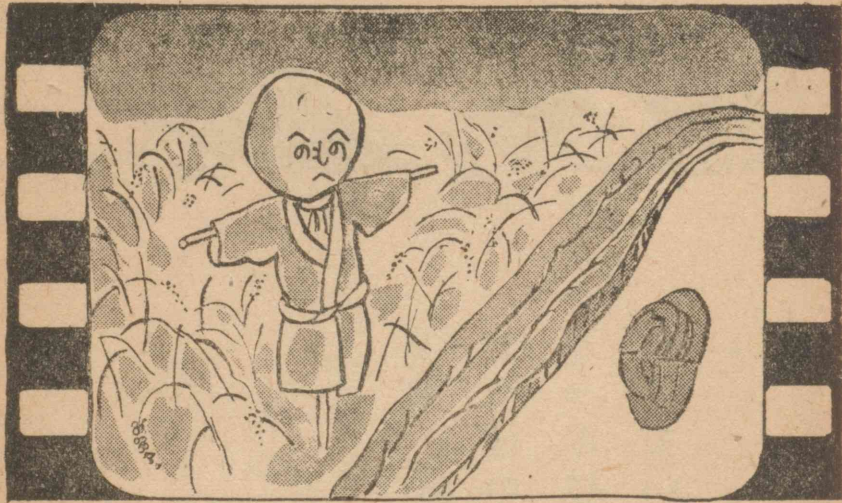
子がらす一

「さあ、あのかかしたたら、さようなら。」

とか、「ありがとう。」とか、
なんべんもなんべんも
さけんでいたよ。」

43

「へのへのもへのかかしが、む
ねをはって、目をむいて、た
んぽをみわたしている。
かかしの目のまえに、風こそ
よぐ金色のいねが、いちめん
につづいている。」





四 空のうた

おちば

北風、からかぜ、寒いのに、
おちばの、おちばの子どもたち、
じゃんけんばらばら
かけていく。

からから、かけかけ、どこへいく。

おちばの、おちばの子どもたち、
ちよんちよんすすめと
どこへいく。

かきの秋

やまが、草屋ののきまでたれて、
かきはすすなり、
夕がらす。

ませにくびだす子うまの顔に、



かきはすずなり、
夕明かり。

海

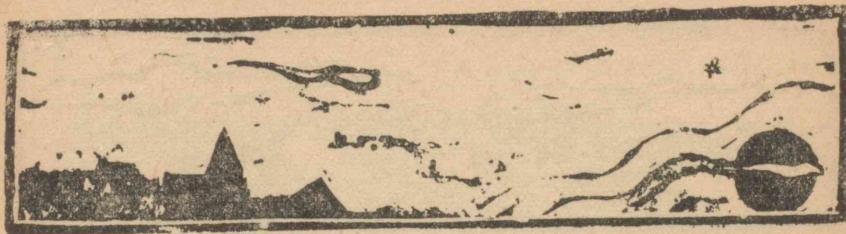
どこかでだれかがめくってる、
大きなきれいな一ページ、
生きた絵本の一ページ。
ふと、そんなこと思わせる、
あのまっさらな海の色。



書いても書いても書きたりぬ、
わたしの心の小人たち、
いつもでてくる小人たち。
ふと、そんなこと思わせる、
あのまっさらな波の音。

空のうた

うすむらさきにほのぼのと、
明かるくそまる朝の空。
楽しいことがあるような、



ああ、さわやかな朝の空。

すんだ青さをもちながら、

ときにはくもる晝の空。

考えごともできそうな、

ああ、おおらかな晝の空。

くらければこそ光る星、

ねむりをふらす夜の空。

きたないこともきえそうな、

ああ、おごそかな夜の空。

五 月と雲

月の明かるいばんでした。屋根も、木の葉も、石ころも、

みんなきれいに光っていました。ふみおと、よしおと、みち

この三人が、かげふみをして遊んでいました。

そのうちに、あたりがきゅうにくらくなって、かげがみえ

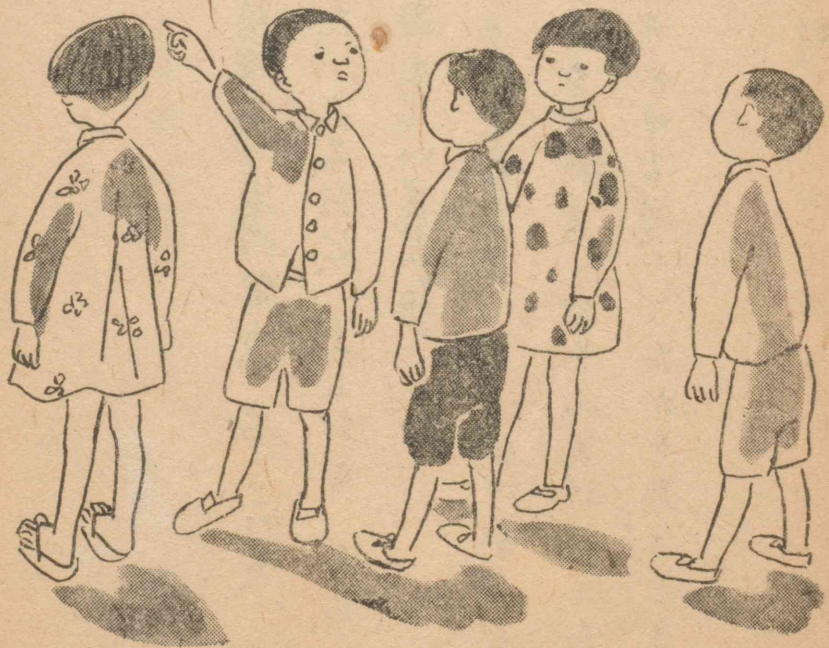
なくなりました。三人は遊ぶのをやめて、空をみあげました。

月は、雲にはいったかと思うとすぐで、でたかと思うとま

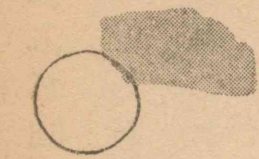
たすぐはいります。

「お月さまが早く走っているね。」

と、よしおがいました。
月はいま雲からでて、大
いそぎではなれていきます。
そうして、つぎの雲の方へ
どんどん走っていきます。
けれども、じっと月をみ
つめていると、月は動か
ないで、雲が大いそぎで
ていくようにもみえます。
「お月さまじゃないわ。雲
が走っているのよ。」



と、みちこがいました。
ふみおは、両方のいうことをきいていました。
「よしおくんはお月さまが走っているといったね。みちこさ
んは雲が走っているっていうの。」
「お月さまをじっとみていてごらんなさい。雲が大いそぎで
とんでいくでしょう。」
「でもね、雲をじっとみていてごらん。お月さまがずんずん



動いていくのがよくわかるよ。
「へんだなあ。お月さまをみると雲が動いて
いくし、雲をみるとお月さまが動いていく。
いったいどっちなんだらう。」

ふみおは、こういって、空をみあげました。

よしおとみちこが「月が走る。雲が走る。」といいあっているのをききながら、ふみおはふしぎでたまりませんでした。

ふみおはふと気がついて、まえの方にある木の下へいきました。そうして、しばらくえだごしに月をみていましたが、

「ここへきてごらん。ほら、よくわかるよ。」と、手まねきをしました。

ふたりは木のそばへ走っていきました。

「ここに立って、お月さまをえだのあいだからみてごらん。」

ふたりはそのとおりにしてみました。すると、月はえだのあいだにじつとしていますが、雲はさっさと走っていきます。

よしおが大きな声をだしました。

「やっぱり雲が走っているんだね。」

「こうするとよくわかるのね。」

と、みちこも感心しました。

それから、三人はわかれて、それぞれ家へ帰りました。

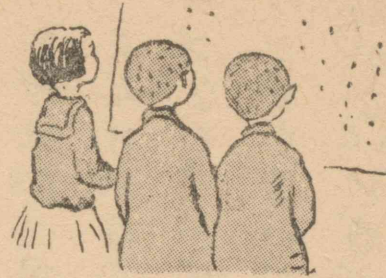
ふみおがねるまえにそとをみると、空はいつのまにか、雲一つなく、きれいにはれわたっていました。ふみおはさっきのことを思いだして、また、にわの木の下へいってみました。動かないと思ってみた月は、もうさっきのえだのあいだにはなくて、木をずっとはずれてしまっていました。

六 かべ新聞

私の学級では、来週から、かべ新聞を発行することにしました。

かべ新聞第一号は、一組でつくることになりました。それから、二組、三組と、じゅんじゅんにへんしゅうをすることに決めました。

私たち一組のものは、みんな集まって、どんなものにしようかというろ相談しました。手わけをして、やっどつぎのようなもののできあがりました。



かべ新聞 第一号

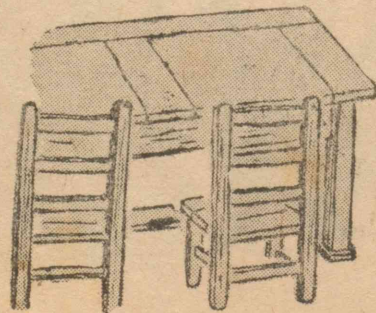
はじめのことば

こんど私たちの学級で、かべ新聞を発行することになりました。

これには、みんなにお知らせしたいことを書きます。

みんなが喜ぶようなことを書きます。

みんなのしらべたことをはっぴょうします。おもしろいことも、おかしいことも書きます。どうぞ、みなさんの氣づいたことは、なん



でも、かかりのものにお知らせください。

「楽しい学級は、かべ新聞から。」



雪の朝

このあいだ雪のふった朝、一年生の子が、学校にくる道で、はき物に雪がついてころびました。そのひょうしに足をいためて、歩けなくなり、そこを通りかかった人が、おんぶして学校までつれてきました。この人は、私たちの組のまつもとさんです。



んです。



七と五と

私は、きのう、おもしろいことに気がつきました。それはことばの声のかずのことです。うたうたは、なぜうたいやすいかと考えました。どうして、ふだんの話がうたえないいのかと考えました。そのわけがわかりました。うたうたは、そのことばの声のかずが、五か七になっているのです。

「空のうた」をしらべてみました。

ウスムラサキニ——七

ホノボノト ————— 五

アカルクソマル ————— 七

アサノソラ ————— 五

タノシイコトガ ————— 七

アルヨウナ ————— 五

アアサワヤカナ ————— 七

アサノソラ ————— 五

それから、まえにならったのを思いだして書いてみました。

カボチャノハナガ ————— 七

サキマシタ ————— 五

アンナトコロニ ————— 七

サキマシタ ————— 五

いろはがるたやことわざの中にも、このことのあるあてはまるものがみつかりました。

これがわかったとき、私はおもしろくてなりません。また、ふしぎでなりません。みなさん、ためしてみてください。(はらだ)

寒だん計



けさの温度は五度です。毎朝、このらんに、その日の朝の温度を書きつけましょう。

「子どもは風の子。」

「ねこは、こたつでまるくなる。」



一口話

川が流れていました。

くつが流れてきました。そこへきゅうりが流れてきました。きゅうりがくつの中にはいりました。

「きゅうくつ、きゅうくつ。」

どいりました。



みじかい文

朝日の光で、

アルコールのびんが

きらっと光った。

アルコールは銀の水。

弟がせきがでるので、

おかあさんはゆたんぼをいれている。

わたしもせきがでたらいいなあ。

手をあらって、しゃぼんを水の上へおいたら、

つるっとすべった。

つかまえて、たなにあげたら、

あぶくをだしておこった。

どうして、八時に

なると、

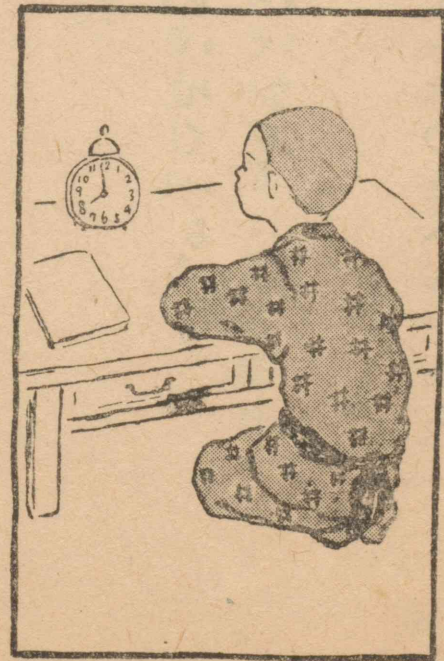
ねむくなるのだろ

う。

どうしてだろう。

だれがねむくする

のだろう。(いしの)



なぞ



なあに。

一 世界じゅうで、いちばん力のつよいものは
二 上にすれば下になり、下にすれば上になるものはな
三 はたらくときはよこになり、休むときは立つものはな

なあに。

このなぞの答がわかった人は、紙に書いてかべ新聞が
かりのものにだしてください。



つづき話

この第一号に、つづき話の第一かいめを書きます。
第二号をつくる人たちは、このお話のつづきを書いてくださ
い。

第三号をつくる人は、またそのつぎを書くのです。
そのようにして、どこまでもお話をつづけてみましょう。ど
んなふうにお話がすすんでいくか、楽しみではありませんか。
お話の題はべつにきめませんから、かっつにつぎを考えてく
ださい。

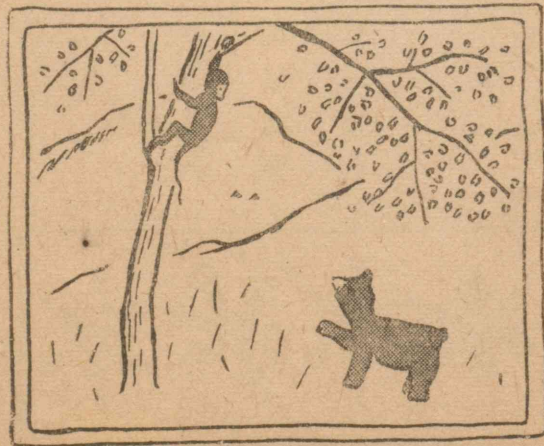
つづき話(第一かい)

あるところに、一ぴきの子ぐまが
住んでいました。お友だちと遊ぼう
と思つて、山の谷を歩いていきまし
た。すると、一ぴきのさるにであ
いました。

「さるさん、さるさん。遊びましょ
う。」

と、子ぐまがいうと、さるは子ぐまをみてこわがって、

「きゃつ、きゃつ。」



と行って、木の上にするするとのぼって行ってしまいました。
子ぐまはまた歩いていきました。



このほか、「雪のかたちを五つばかり、きれいに写生しました。それを切りとって新聞にはりつけました。それは、むしろがねでよくみながら書いたのです。

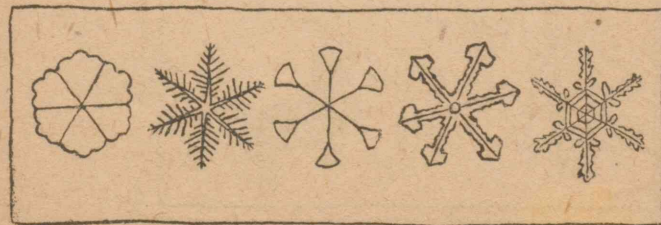
まんがもいれました。一組の人がみんな考えてこしらえたまんがです。クロスワーズパズ

ルもこしらえました。ことば遊びも書きました。

この学校の子どものかずや、一ばん遠くから通っている子どもの名や家の場所も書きました。

かべ新聞の大きさは、わら半紙を四まいはりあわせたものです。そんなに大きくはありませんが、これをじょうずにくぎって、きれいに、むだのないようにへんしゅうするのは、むずかしいことでした。

第二号がどんなふうになるか、楽しみです。





七 だれのか

ごろうは、妹のはるえといっしょになつて、大きな雪だるまを作りました。目も、

はなも、口もつけました。

「にいさん、この雪だるま、歩きだしそうね。」

「ほんとに歩くとおもしろいな。」

「お話もしたら、なおおもしろいわねえ。」

「雪だるま、どんなお話をするだろう。」

そこへ、中学校に通っているねえさんが、帰ってきました。

「まあ、よくできたのね。」

「いま、この雪だるまが、お話をすればいいって、いっていたところよ。」

これをきいて、ねえさんはわらいました。

「口があるから、お話もするかもしれませんよ。」

「でも、こんな口じゃ、だめだわ。」

と、はるえは本氣になっていきました。

はるえは、まえに「こくごてならったよみかき」のところを、ふと思いだしました。

「そうね。はるえさんのいうとおりね。雪だるまはお話はしないけれども、はるえさんが、なにかお話をしてあげたら

どう。

「たるまさんのうたをつくって、うたってあげようか。」
「雪だるま、きっと喜びますよ。」

その日、ばんごはんをたべながら、ごろうはこんなことを
考えました。

「いったい、あの雪だるまは、死んでいるのか、生きている
のか。もちろん生きているとは思わないが、死んでいるとも
思えない。死んでいたら、ころがってたおれるわけだし、目
だってつぶってしまいうらうし、あんなに元氣のいい顔つき
もしていないはずだ——」

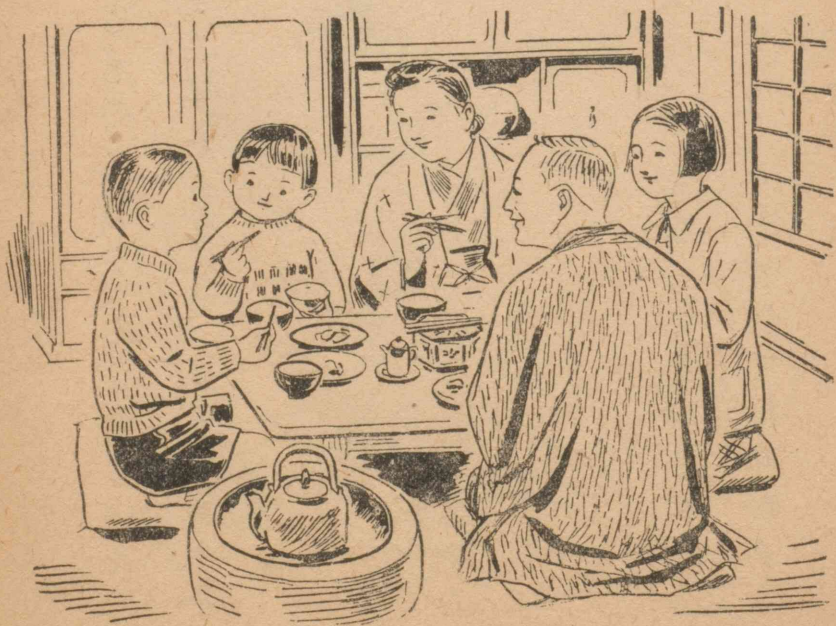
「ごろう、なにを考えこんでいるんだね。」

おとうさんにたずねられて、

「雪だるまのことです。」

と、とんでもない話を持ちだ
したので、みんながわらいま
した。

「ね、おとうさん。雪だるま
は生きているのでしょいか、
死んでいるのでしょいか。」
「さ、どっちかな。」
「ぼく、どっちだかわからな
くなっちゃった。」



おかあさんが、

「ねえ、ごろうさん。生きているものには、みんな命というものがありませんよ。それを考えたらわかるじゃありませんか。」とおっしゃいました。

「命って、動くものでしょうか。」

「動きますとも。」

「風なんかも。」

「あれはちがいますよ。」

「汽車は。」自動車は。「雪は。」火は。「こんなことをつぎからつぎへと考えました。たとえ動いても、それだけでは命があるとはいえないと、ごろうは思いつきました。」

あくる朝、おとうさんから、

「どうだ、ゆうべの命のこと、わかったかい。」

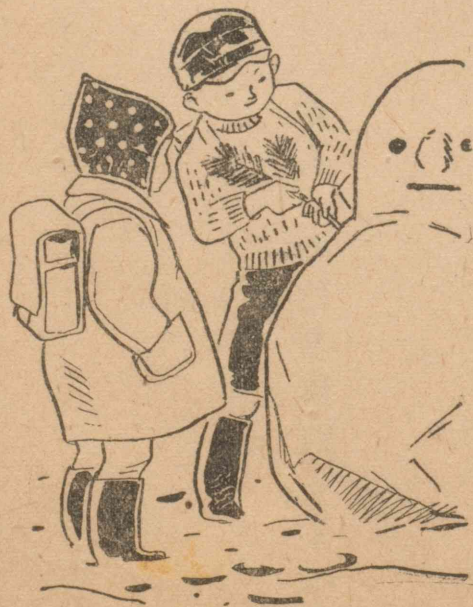
ときかれて、ごろうは、

「まだけんとうがつかいません。」

と答えました。

「だいいち、おまえが生きているんだから、わかりそうなものだがな。」

学校へいくとき、雪だるまのかたのところに、まつのえだ



をつけました。

はるえはそれをみて、

「にいさん、これなあに。」

とききました。ごろうは、

「手だよ。」

といいながら、この手が動かないから、やはり雪だるまは命がないのかなと思いました。

ごろうが学校で、

「先生、ぼくたちは動いたり息をしたりするから、生きてい
るんでしょう。」

「なんだい、ごろうくんは。きゆうにそんなことをきいたり
して。」

「きのうから、それを考えているんです。ぼくたちは、だん
だん大きくなるから、生きていくんでしょう。」

「たしかに、動いたり大きくなったりしているものは、みんな
な生きものだね。」

「雪だるまは動きもしないし、息もしていませんね。」

「雪だるま、雪だるまは生きものではないからね。」

「わかった、わかった。」

いぬは動くし、いきをするから命がある。うしもうまもそ
うだ。風や、自動車や、水車は、動いていても息をしないか
ら、命がないんだと、ごろうは考えつきました。

その夜、ごろうはおとうさんに、この考えついたことを話しました。すると、おとうさんは、

「よく考えた。命のあるものは、日に日にそだっていく。たとえ動かない木でも、草でも、命をもっているのだよ。とにかく、命のことはむずかしい大きな問題だね。」

とおっしゃいました。そばからねえさんが、

「ごろうさん、あなたは、ねむってしまったら動かなくなるでしょう。けれども、息はするでしょう。だれがそうさせるのかしら。」

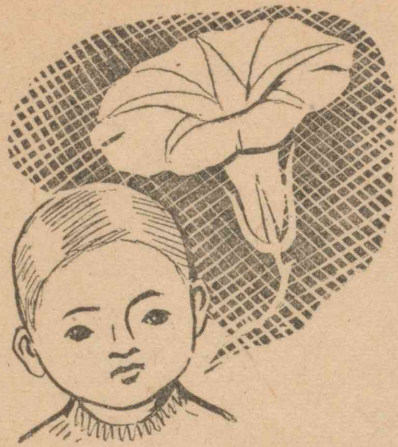
といました。

ごろうは、息をすることも自分の力ではないことをきいて、なるほどと思いました。

「息ばかりではありませんよ。ほら、左のむねのところを手をあててごらんさい。どきんどきんやっているでしょう。」

しんぞうのこどうですよ。あなたが、それを動かそうと思って動かしているの。ちがうでしょう。息と同じように、あなたがねむっているときも、どきんどきんやっていますよ。

ごろうは、いつか「こくご」でならった「あさがおの花」を思い出しました。そうして、自分とあさがおの花とが、たいへん近いもののように思われました。



八 つりばりのゆくえ

一のばめん

みほりの
「にいさん、お願いがあります。」

みほりの
「なんだ。」

「にいさんは毎日海へでて、魚をとっていらっしゃるが、私は毎日山へいって、鳥やけものをとっていますね。」

みほりの
「そうだ。それがどうした。」

みほりの
「お願いがあるのです。」

みほりの
「どういうことだ。」

みほりの
「きょう一日だけ、私

につりをさせてくださいますか。その

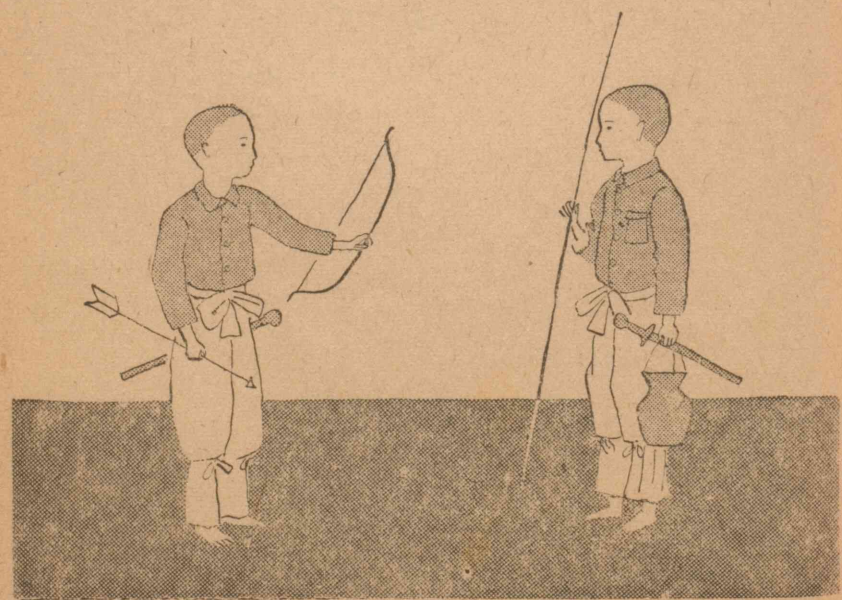
かわり、にいさんは

山へいらっしゃって。」

「そんなこと、いやだよ。」

よ。

みほりの
「たった一日だけいいのです。」



ほおりの
みこと

「いくら一日でも、いやだ。」

ほおりの
みこと

「一どつりがしたいのです。」

ほおりの
みこと

「そんなにつりがしたいのか。」

ほおりの
みこと

「あの大きなたいをつつてみたいのです。」

ほおりの
みこと

「そううまくつれるものではないよ。でも、つつてみるがいいさ。わたしは山へいこう。」

ほおりの
みこと

「ほんとう、にいさん。」

ほおりの
みこと

「このつりざおを持っていくがいい。」

ほおりの
みこと

「ありがとう、にいさん。にいさんはこの弓と矢を持っていらっしゃい。」

二のばめん

ほおりの
みこと

「どうしてつれないのだから。」

う。朝から一びきもつれ

ないなんて——

おや、ひく、ひく。ぐい

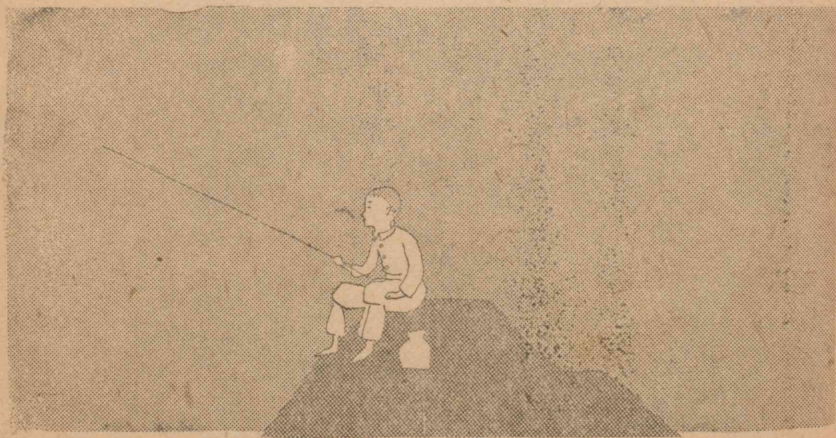
ぐいひくぞ。大きな魚ら

しい。ひきあげてみよう。

よいしょ。

ほおりのみことはつりざおをひ

きあげる。糸がぶつつりと切れ



て、魚はにげる。

ほおりの
みこと

「しまった。大きいのをにがした。」

あ、つりばりをとられた。どうしよう。こまったな。

三のばめん

ほおりの
みこと

「おもしろくなかった。小鳥一わとれやしない。さ、

ゆみやを返すよ。」

ほおりの
みこと

「にいさんもやっぱりえものがなかったんですか。」

ほおりの
みこと

「おまえは、なにかつったか。」

ほおりの
みこと

「いいえ、つれませんでした。つれないどころか、申

しわけのないことをしてしまいました。」

ほおりの
みこと

「どうしたのだ。」

ほおりの
みこと

「つりばりを魚にとられ

てしまいました。」

ほおりの
みこと

「とられたって。」

ほおりの
みこと

「はい。」

ほおりの
みこと

「申しわけがありません。」

ほおりの
みこと

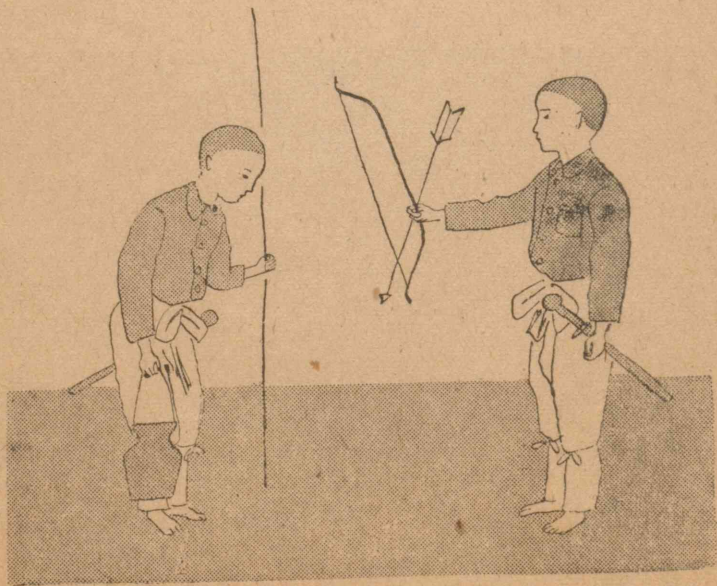
「どんなことでもして、

ほおりの
みこと

おわびいたします。」

ほおりの
みこと

「だいじなつりばりをなくしてしまふなんて。おまえ



ほおりの
みこと

「からいいだしておいて。」
「にいさん、ゆるしてく
ださい。」

ほおりの
みこと

「いや、ゆるすことはで
きない。」

四のばめん

ほおりのみことは、海べでな
いている。そこへひとりの年
よりがでてくる。



年より

「もしもし、あなたは、どうしてないていらっしやる
のですか。」

ほおりの
みこと

「つりばりは魚にとられてしまっし、にいさんにはし
かられるし、こまってないていたのです。」

年より

「では、私がいいことを教えてあげまっしう。そこに
船がある。あれにお乗りなさい。まもなく、きれいな
なごてんにつくでしう。」

ほおりの
みこと

「なんのごてんですか。」

年より

「海のごてんです。そのごてんの門のそばにいと
があつて、そのそばには、大きな木が立っています。
あなたは、その大きな木にのぼつて、まっていらっ

「しゃい。」

ほおりの
みこと

「木にのぼるのですか。」

年より

「そうです。すると、海の神は、きっといいことを教えてくださるでしょう。さあ、早く船にお乗りなさい。おしてあげますから。」

五のばめん

海のごてんの門のまえに、大きな木が立っている。

ほおりのみことは、木をみあげて、

ほおりの
みこと

「ははあ、この木だな。のぼってみよう。」

木にのぼって、下をみる。

ほおりの
みこと

「おや、あんなところにいどがある。きれいな水だな。」

そこへ女の人がでてきて、

いどの水をくもうとする。

いどの水を見て、

女

「まあ、りっぱなかたが、水にうつっているわ。」

女の入は木をみあげなが



ら、おじぎをする。

ほおりの
みこと

「すみませんが、そのいどの水を一ぱいください。」

女

「はい。」

女の入は、水をくんで、ほおりのみことにさしあげる。

ほおりのみことは、ぐっとおのみになって、

ほおりの
みこと

「ああ、おいしい水。ごちそうさま。」

六のばめん

正面に、海の神がこしをかけていらっしやる。

そこへ、さっきの女の入がでてくる。

女

「海の神さまに、申しあげます。」

海の神

「なんだね。」

女

「門の木の上に、りっぱなかたがいらっしやいます。」

海の神

「木の上に、りっぱなかたが。」

女

「さようでございます。」

海の神

「では、そのかたをこちらへごあんないしなさい。」

女の入は、いったんさがる。まもなく、ほおりのみことを

あんないしてでてくる。

海の神

「さあ、どうぞこちらへ。」

ほおりのみことは、こしをかける。

海の神

「あなたは、どなたでいらっしやいますか。」

ほおりの
みこと

「私は、ほでりのみことの弟、ほおりのみことです。」

海の神

「あ、さようでございましたか。なにかご用でございましたでしょうか。」

ほおりの
みこと

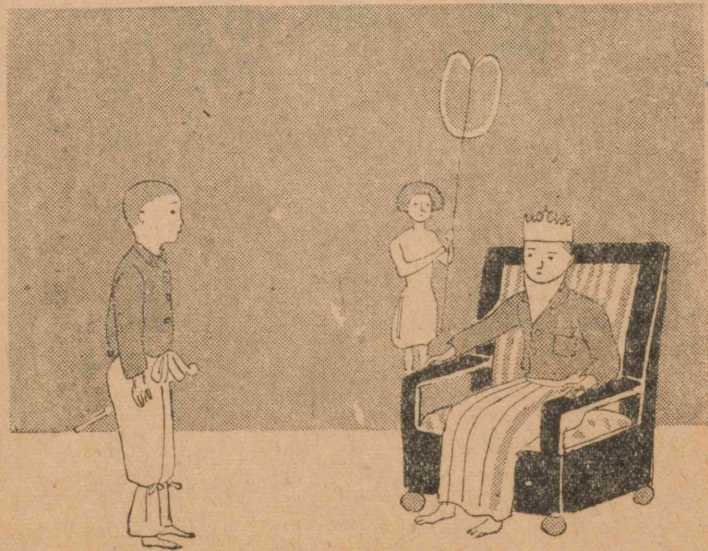
「じつは、海でつりをしていたら、つりばりをとられてしまったのです。」

海の神

「つりばりを。」

ほおりの
みこと

「そうです。あにのたいじなつりばりなので、私もこまってしまいました。」



海の神

そこへ年をとったかたがあらわれて、私に海のごてんへいくようにと教えてくださいました。それで、いまここへやってきたところですよ。」

「そうでしたか。それはおこまりでしょう。では、さっそくさがさせてみましょう。」

女の人に向かって、

海の神

「魚どもを、みんなここへよび集めるように。」

女

「はい。」

女の方は、魚たちをたくさんつれてでてくる。

女

「魚どもをよんでまいりました。」

海の神

「これで見んなか。」

女

「はい。たいだけは、病
氣でねておりますの
で、ここへはまいっ
ておりません。」

海あ神

「そうか。みなのもの
にたずねるが、だれ
か、このかたのつり
ばりをとっていった
ものはないか。」

魚一

「ぞんじません。」

魚二

「とりません。」

魚三

「ちっともぞんじませ
ん。」

海の神

「それはおかしい。い
や、たしかにあるは
ずだ。だれか知って
いるものはないか。」

魚たち

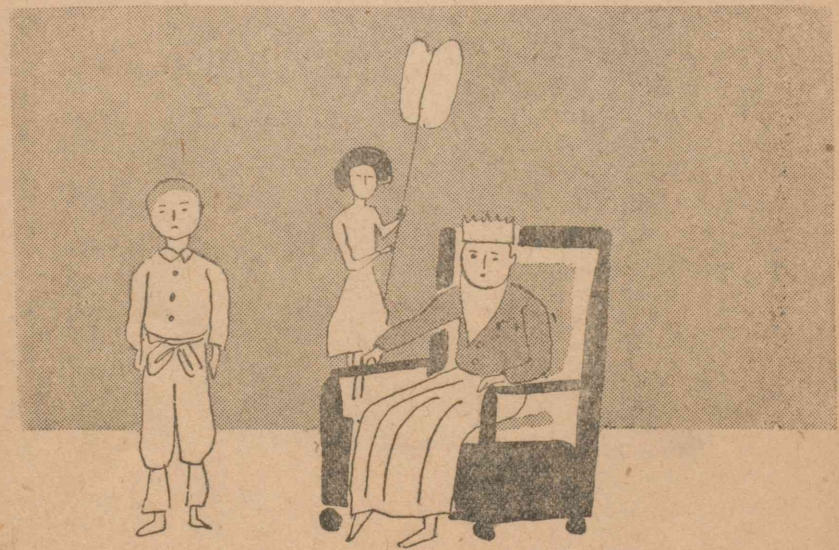
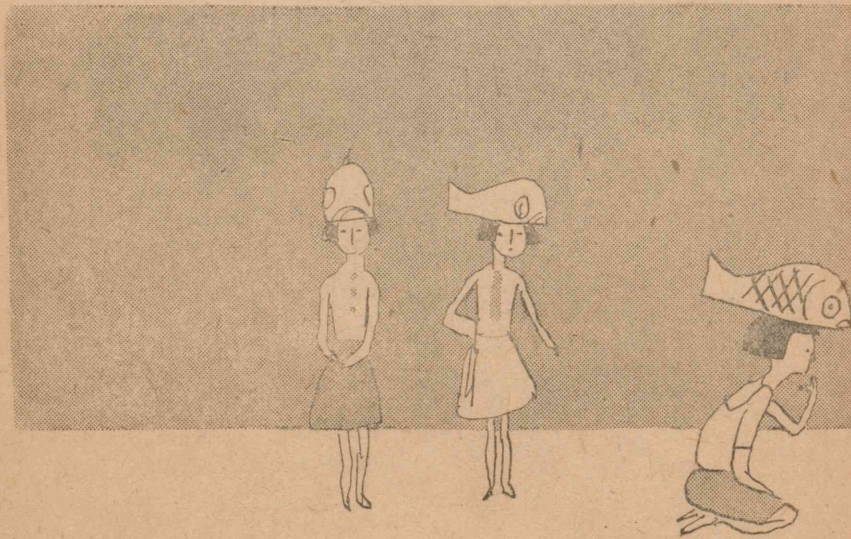
「ほんとうです。」

海の神

「おかしいな。」

海の神は、しばらくお考
えになって、女の人に、

「それでは、たいをち



よつとここへよんできてくれないか。

女 「はい。」

女の入は、たいをつれてでてくる。

たい 「なにかご用でございましょうか。」

海の神 「おまえは、このかたのつりばりを知らないか。」

たい 「このあいだから、つりばりをのどにかけまして、た

いへん苦しんでいるところてございます。」

海の神 「あ、それにちがいない。」

女の人に向かつて、

海の神 「たいののどから、つりばりをとっておやり。」

女 「はい。」

つりばりをとる。

たい 「あ、これですっかりらしくなりました。」

女の入はつりばりを水であらって、海の神にさしあげる。

海の神 「たしかにつりばりだ。」

海の神は、ほおりのみことのまえにさしだしながら、

海の神 「このつりばりではございせんか。」

ほおりのみこと 「あ、これだ。これです。」

海の神 「みつかって、ほんとうによろしゅうございました。」

ほおりのみこと 「ありがとうございます。ありがとうございます。」

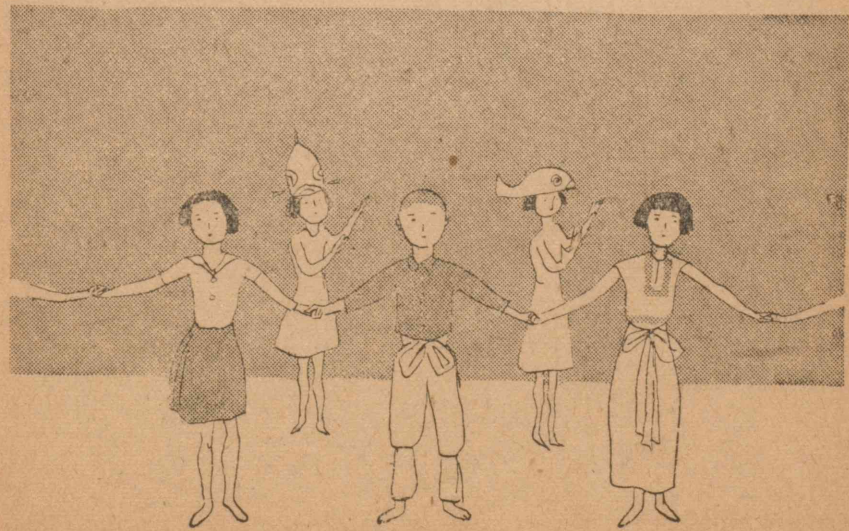
魚たちが合唱をする。みことは、それにあわせておどりを

おどる。

だいじなだいじなつりばりが、
でてきて神さまお喜び。

いたい、いたいとないていた、
たいも喜び、おめでたい。

めでた、めでたとさかなたち、
みんなでまうやら、うたうやら。



九 ぼくの発見

(一)

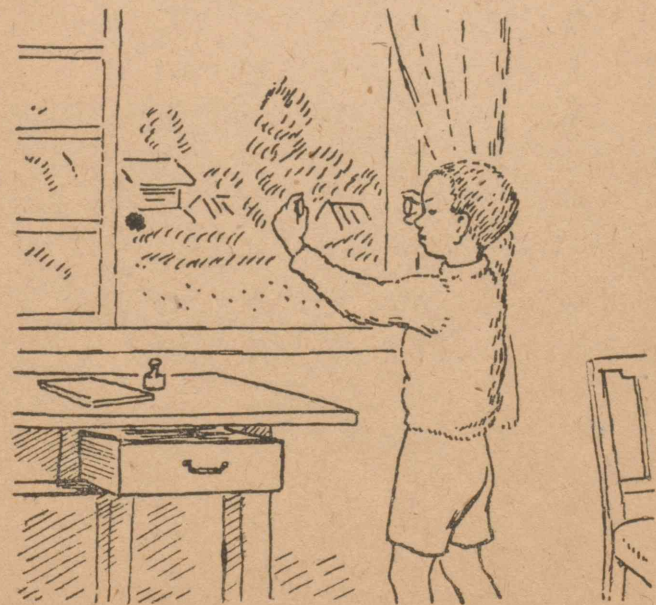
つくえのひきだしをかたづけていると、いつか、おじいさん
にいただいた古いめがねのたまど、おとうさんにかっ
ただいた小さな虫めがねがでてきた。

「これは、いいものがみつかった。」と思いながら、ぼくは、
この二つをかさねたりべつべつにしたりして、つくえの上を
みたりそとのけしきをのぞいたりしていた。

そのうちに、ふと、おもしろいことを発見した。

左の手に、めがねのたまを持って、目から遠くはなした。

すると、向こうのけしきが、小さく、さかさまにみえた。そのさかさまにみえるけしきを、大きくしてみようと思って、右の手に虫めがねを持って、のぞいてみた。どこかの屋根が、めがねのたまいっばいにひろがって、ついそこにあるようにみえるではないか。それは、ここから百メートルもはなれている。向こうの家の屋根であった。



きるかもしれない。

「これで、いつか、おとうさんのお話にきいた望遠鏡が、できた。」

ぼくは画用紙をとりだした。そうして、その一まいをぐるぐるとまいた。ちょうど、めがねのたまがはまるくらいの大きさにまいて、その一方のはしに、めがねのたまをはめた。きちんとはまったとき、まいた紙を糸できりきりとまいて、動かないようにした。これで、一本のつつができあがった。つぎに、もう一まいの画用紙を、ぐるぐるとまいた。そうして、さっきのつつの中へ、ちょうど、するすとはいるくらいの大きさに作って、そのはしに、虫めがねをとりつけた。

こうしてできた二本のつつは、うまくはまりあって、長くのばしたりちぢめたりすることができる。

「さあ、できたぞ。うまくみえるかしら。」

ぼくはこうひとりごとをいいながら、そとをのぞいてみた。長い物がぼんやりみえる。二つのつつをのばしたりちぢめたり、かげんしているうちに、はっきりした。

電柱だ。はりがねが六本あることまでわかる。

もっと下をみる。屋根だ。しょうじだ。おや、だれかが、しょうじのあいだから顔をだしている。いそいで、おかあさんのところへいった。

「おかあさん、きてごらんなさい。早く、早く。」

おかあさんは、目をまるくして、

「なんです、まさおさん。大き

な声をして。」

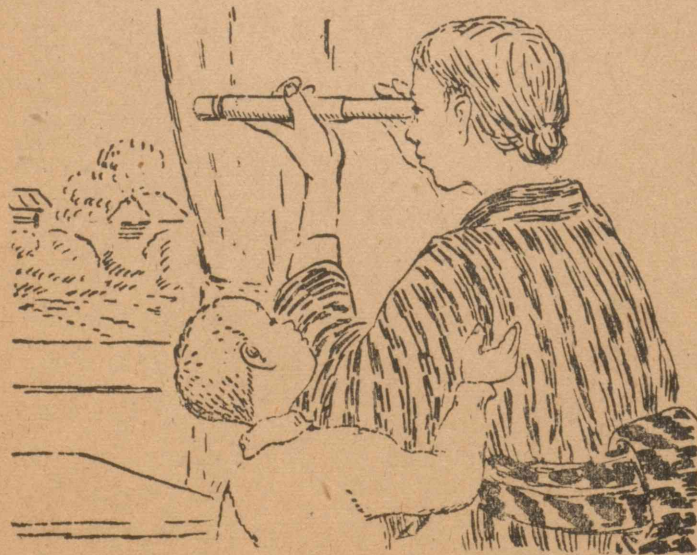
「なんでもいいから、きてくだ

さい。」

ぼくは、おかあさんをひっぱるようにして、つれてきた。そうして、ぼくの望遠鏡をのぞいてもらった。

「まあ、よくみえるね。でも、

さかさまじゃないの。」



「さかさまでも、よくみえるでしょう。」
「向こうの家のせんたく物もみえますよ。あ、人がこっちを
みている。森の木のきれいなこと。」
ぼくとおかあさんは、かわるがわるこの望遠鏡をのぞいて
楽しんだ。

(二)

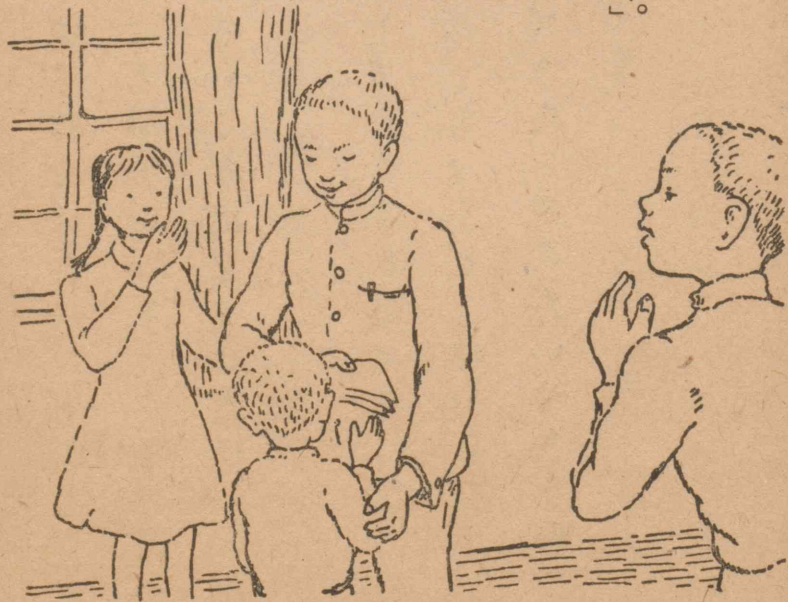
弟は、二三日まえから、かぜぎみである。しかし、ねつは
ないので、ねているわけではない。ただ、はながつまってい
るだけだが、そのために発音がすこしおかしい。「あのねえ」と
いうのが、「アドデエ」ときこえる。「にいさん」というのは、「リイ
サン」のようだ。

さつきも、「紙をちょうだい。」
というのが、「カビヲチヨウダイ。」
ときこえたので、にいさんが、

「ハダヲカブノカイ。」

と行って、みんなで大わらいを
した。弟のことばをまねて、「は
なをかむのかい。」といったので
ある。

ぼくも、もちろんわらった。
そして、にいさんのまねのう



まいのに感心した。弟は、まえに、「はなをかむ」ということばを、そのようにいったことがあるのではない。しかし、「バダヲカブ」というのが、いかにも弟のいいそうなことばつきである。その、弟がまだいわないことばを、さきにいったから感心したのである。

そこで、ぼくもひとつまねをしてやろうと思った。なにかよいおりはないかと思っていいたら、ちょうど、空からブルン、ブルンというばくおんがきこえてきた。弟のだいすきな飛行機である。ぼくは、ここだと思って、

「あっ、ビゴウキダ。」

といった。いってから、すこしふしぜんだなと思った。みんな

なもあまりわらってくれない。弟が、

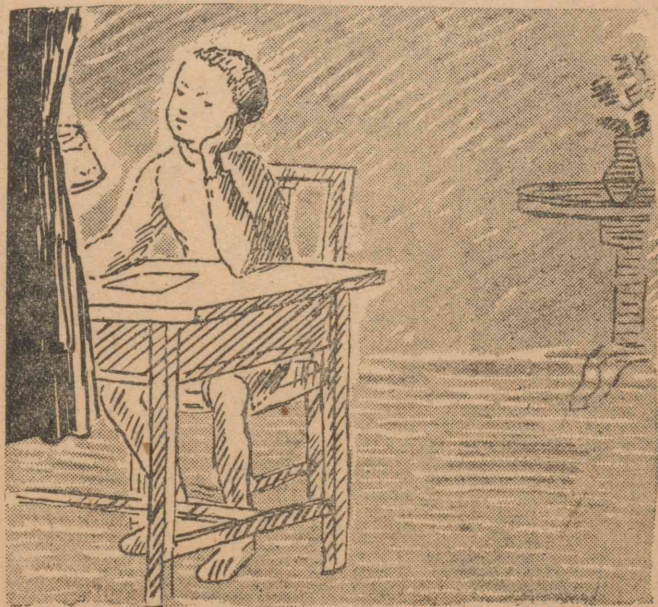
「飛行機なら、ちゃんと、ヒコーキといえるよ。」

といったので、みんなは、これで大わらいとなった。

ぼくのまねはしくじった。しかし、ぼくは、このおかげで、おもしろいことに気がついた。弟ははながつまっているために、あることばが、うまく発音できなくなっている。しかし、どんなことばでも発音できないわけではない。発音できることばと、できないことばとがある、ということに気がついたのである。

ぼくは、夜、勉強をすましてから、ひとりで、なぜはながつまるといえなくなることばと、はながつまってもいえるこ

とぼとがあるのだから、と考えてみた。そのわけは、すぐけんとうがついた。はながつまつたために発音ができなくなるような音は、もともとはなから声のでるような音にちがいない。そうして、はながつまっても発音できるような音は、はなから声のでない音のはずである。ぼくは、いままで、ものをいうときに、声はなからでるかでないかということ、考えたことがなかった。これはおもしろ



いぞとぼくは思った。

では、なんという音が、はなから声のでる音なのだろうか。弟は、「はなの「ナ」、あのねの「ノ」と「ネ」、に「い」さんの「ニ」、紙の「ミ」、かむの「ム」が、いにくいらしい。すると、これらははなからでる音なのだろう。そう思って、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」「ミ」「ム」と自分で声をだしていってみると、いかにもはなから声のでているような気がする。そこでぼくは、自分ではなをつまんで、はなのあなから息がもれないようにして、「ナ」「ノ」「ネ」「ニ」「ミ」「ム」といってみた。苦しい。はなから声のでる音であることはたしかとなった。自分ではなをつまんで、「ナ」といいながら、耳で聞いてみると、まるで「ダ」といっているようだ。弟は、

こんなふうにして、「はな」といつているんだなと思うと、きゅうにおかしくなった。これなら、弟のまねなんかわけはないぞと思った。なんでも、「ナ」や「ノ」のつくことばがあったら、「ダ」や「ド」にいいかえればいいわけだ。ためしに、「なんだ」というかわりに、「ダンダ」といつてみると、いかにも弟のいいかたそっくりになった。それでほくは、思わず声をたててわらってしまった。

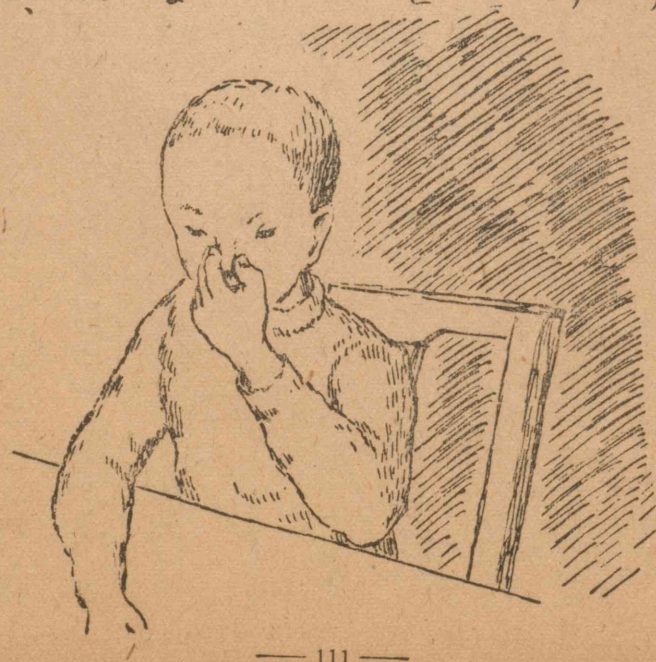
よし、あしたはうまくやって、みんなをわらわせてみせるぞと思つたが、そのとき、新しいことがあたまにうかんだので、もうそんなことはどうでもよくなつてしまった。弟がいない音の中で、「ナ」、「ノ」、「ネ」、「ニ」は、みんなアイウエオ、カ

キクケコ——という五十音の中で、ナニヌネノという一ぎょうの中にはいつている音ばかりではないか。ただ一つ「ヌ」という音がぬけているだけである。

そこで、あらためて声をだして「ヌ」といつてみた。

これもはなから声がぬけているようだ。ねんのために、はなをつまんで、「ヌ」といおうとしたら、じつに苦しい。そうすると、

ナニヌネノという一ぎょうは、ぜんぶはなの音でできている



ことがわかった。

このほかに、弟は「ミ」、「ム」がいえなかった。この二つは、両方とも、マミムメモという一ぎょうの中にはいつている。ここで、もしやと思って、はなをつまんで「マ」、「メ」、「モ」といつてみたら、これらもはなの音であることがわかった。そうして、こんどは、アイウエオ、カキクケコから、じゅんじゅんにいつてみたところが、ふしぎふしぎ、はなからでる音は、ナニヌネノ、マミムメモの二ぎょうだけで、あとは、おしまいのバビブベボ、バビブベボにいたるまで、みんなはなから声のでる音ではないことがわかった。

ぼくは、五十音というものは、一年生のときにならったか

らよく知っているが、いままでは、「ちがったかなをならべたもの」ぐらいに思って、それ以上ふかく考えてみたことはなかった。それがいま、一つ一つの音の性質を考えたりえて作ったものであることがわかって、びっくりしてしまった。カキクケコでも、サシスセソでも、かんたんにはわからないが、一ぎょう一ぎょうは、なにか、ほかのぎょうとはちがった性質をもっているにちがいない。

ぼくは、こう考えると、弟のまねをしてみんなをわらわせてやろうなどという氣持は、どこかへふつとんでしまった。それよりも、五十音について、新しく思いついたことをみんなに話して、びっくりさせてやろうと考えたからである。

十 たこ

おじさんからたこをいただきました。ま四角で、ほねが二本しかついでいたたこです。

はじめてあげにいったときに、みんなが、

「へんなたこだな。こんなものがあがるものか。」

といてわらいました。けれども、あげてみると、なかなかよくあがりました。だれのたこよりもよくあがりました。わる口をいったものも、

「やあ、よくあがる。ふしぎだなあ。」

といて感心しました。

ただしちゃんが、そばから、

「ちよつと糸を持たせて。」

といました。ただしちゃんは、がい地からひきあげてきた子で、來年小学校へあがります。糸を持ったただしちゃんは、

「よくひっぱるな。」

といてにこにこしました。たこが青空で右や左にゆれると、自分もいっしょに首をふりながら、しっかり糸をにぎっています。

「こんなたこ、ほしいなあ。」

と、ただしちゃんがいました。ほんとうにほしそうな口ぶ

りなので、

「作ってあげようか。」

といますと、ただしちゃん喜んで、

「うん、作って。」

と、元氣のいい声でいきました。

たろうさんが、わきから、

「きみ、作れるかい。」

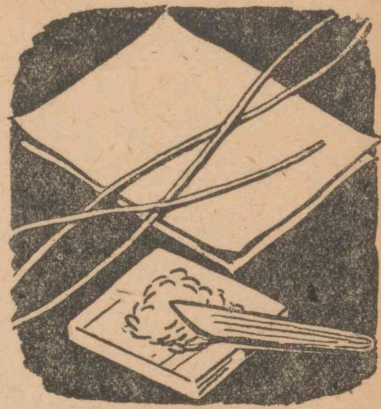
とききました。

「作れるさ。」

と答えましたが、ほんとうは、たこを作るのははじめてです。けれども、いっしょうけんめいに作ったら、できないことは

ないたろうと思いました。

うちへ帰って、そのたこをみて、作りかたを考えてみました。材料は、ま四角な紙と、ほねにするほそい竹二本と、それに、たこ糸やのりなどです。紙は半紙



でいいし、ほねは工作のあまりのひごでまにあわせました。のりは、ごはんつぶをよくねると、いいのりができました。

はじめに半紙をま四角に切りました。なが四角から、ま四角に切る切りかたは、いつかおかあさんに教えていただきましたから、うまくできました。

「なんの絵をかこうか。」と、いろいろ考えましたが、ただし

ちゃんのわらい顔をかくことにしました。

クレヨンで色をつけ、バックをむらさき色にぬりつぶしたら、ただしちゃん
んの顔が、生き
生きとうきあがつ
てきました。

つぎにはねの
とりつけです。
ほねは、たてほ
ねとよこほねの
二本です。まず、
たてほねからはじめました。紙のうらには、



まん中に、ま四角に切ったときにつけたすじがたてについて
います。そのすじにあわせてひごを切り、小さな紙で上と下
とまん中をはりつけました。

それから、よこほね。よこほねはまっすぐではなく、上へ
ゆみなりにまげるのですから、めんどうでした。じっさいに
紙の上でいろいろとまげぐあいをしらべ、ちょうどいい長さ
にひごを切りました。はりつけるのも、まがっているののでめ
んどうでしたが、いろいろにくふうして、はりつけました。
やっとできたので、おかってにいらっしやるおかあさんの
ところへとんで行って、

「やっとできましたよ。」

どいっておみせしました。おかあさんは

「まあ、よくできましたね。」

と、ほめてくださいました。

「これ、ただしちゃんにあげるの。」

「ただしちゃん、大喜びでしょう。でも、のりがかわかない
うちにあまりいじると、すぐはがれますよ。そうっとかわ
かしておおきなさい。」

ぼくは、だいに本ばこの上におきました。

「早くかわくといいな。かわいたら、糸目をつけて、ただし

ちゃんのところへ持っていってあげるんだ。」

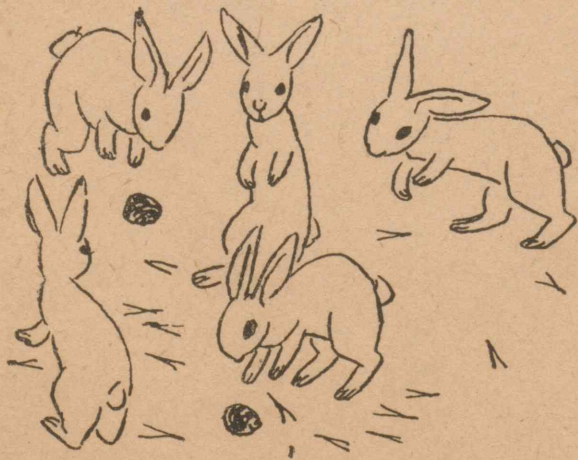
ぼくは、うれしくてたまりませんでした。

十一 うさぎさん

五ひきのうさぎさんがいまし
た。

ある日のこと、五ひきのうさ
ぎさんは、まつ林の中で、まつ
かさで、まりなげをしたり、フッ
トボールをしたりして遊びまし
た。

そこへ、おさるさんがやってきました。



「うさぎさん、そのまつかさをくれないか。」

うさぎさんたちは、おさるさんにみんなまつかさをあげよ
うと、話しあいました。

「あげるよ。お受けなさい。」

うさぎさんたちは、まつかさを一つ一つ、ぽんぽんとおさ
るさんになげてやりました。

おさるさんは、きよろきよろしながら、まつかさを受けと
りました。

うさぎさんたちは、くるみの木の下で遊びました。そこに
は、くるみの実が、ころころと落ちていました。

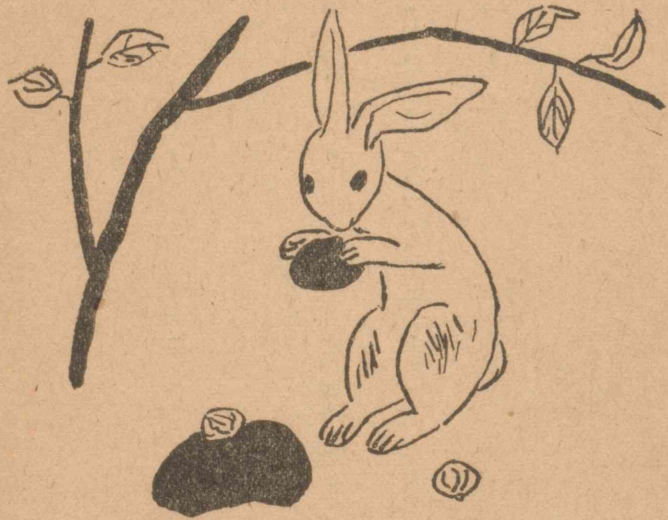
うさぎさんは、くるみをひろって、石でわってたべること
にしました。

「このくるみを持って行って、
山のとっぺんでたべよう。」

そういいながら、カチン、カ
チンとわっていると、そこへちょ
ろちよると、りすさんがきまし
た。

「うさぎさん、なにしているの。」
「くるみをわっているんだよ。」

「かたくて、うまくわれないだらう。」





「石でたたいて、わっているのさ。」
 「たくさんとれたね。ぼくにもちようだい。ぼく、くるみだ
 いすきなんだ。」
 「りすさんは、くるみがだいすきだそうだから、あげようか。」
 「あげよう。」
 「りすさん、さ、あげるよ。おあがり。」
 「りすさんは、両手に、くるみをにぎって、おいしそうにた
 べました。」

「あなをほって、トンネルをこしらえて遊ぼうよ。」

「トンネルか。それはおもしろい。」

五ひきのうさぎさんたちは、めいめいにあなをほりはじめました。

まえ足でほっては、うしろ足で土をはじきだしました。あなはずんずん長くなっていきました。

「そっちのあなど、こっちのあなどつづけようか。」

「つづけよう。」

トンネルはだんだん深くなり、廣くなりました。

「ここで、かくれんぼしよう。」

「しよう、しよう。」

「じゃんけんぽん。」

「あいこでしよ。」

五ひきのうさぎさんたちは、大きな声でじゃんけんをして、おにをきめました。

おにが、目をつぶって、

「もう、いいかい。」

とさけびました。四ひきのうさぎさんたちは、とんとこ、とんとことトンネルの中を走っていきました。

「もう、いいかい。」

「」

「もう、いいかい。」

「もう、いいよ。」

おにも、とんとこ、とんとこどさがしにでかけました。

おにの足音をきいて、四ひきのうさぎさんたちは、うまくにげました。おにがあちらからくると、こちらへかくれ、こちらからまわっていくと、みんなはあちらへこっそりわたりました。

かくれているうさぎさんたちは、おかしいのをがまんしながら、「クック、クック。」といって、うまくにげました。

ところが、一ぴきのうさぎさんが、あわててにげたので、トンネルのさか道に足をすべらせて、ころころと、下の方へころがりこんでいきました。

「みつけた。」

新しいおにがきまって、またはじめようとしたとき、トンネルの入口のところで、だれかの声がします。それはたぬきさんでした。たぬきさんは毛をぬらしてなにかあわてています。

「うさぎさん、かくしておくれ。ちょっとかくしておくれ。」

「どうしたの、たぬきさん。」

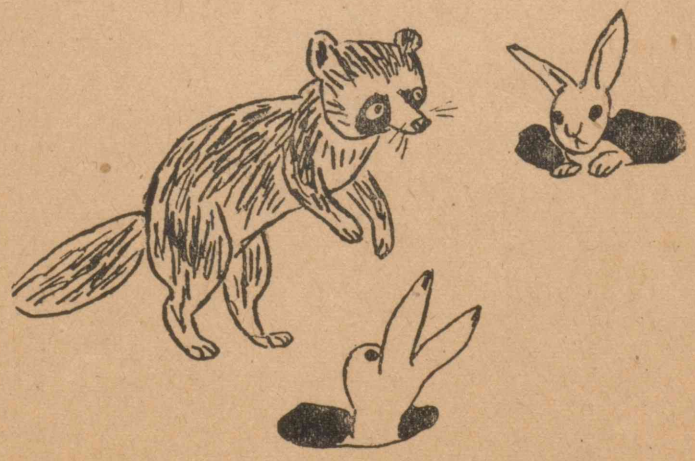
「いま、きつねに追いかけてらるんだ。きつねがおこって、追いかけてくるんだよ。」

「きみたちが、ここでわいわいやっているのは、すぐぼくが、」

きつねにみつかってしまふから、どこかへいってくれたまえ。ぼくひとり、じっとしずかにしていたんだよ。」
たぬきさんが、ま顔になって
いうので、うさぎさんたちは、
たぬきさんがかわいそうになり
ました。

うさぎさんたちは、そのまま
向こうのやぶの方へいってしま
いました。

それをみて、たぬきさんは、「あははは。」と、大声でわらい



ました。

「うさぎたちは、なんてひどがいいんだらう。ぼくはきつねに追われてなんかいやしないんだ。このトンネルがほしかったのさ。このあたたかいトンネルで、今夜 ゆっくりとねむりたかったのさ。」

うさぎさんたちは、大きなけやきの下で、まるくならんて、話をしました。

「こんどはなにをして遊ぼう。」
「かけっこだ。」

「よし、やろう。」

かけっこは、うさぎさんたちのおとくいです。

「決勝点は、あの山のとっぺんにしよう。」

「いいよ。」

「いいとも。」

「ようい。」

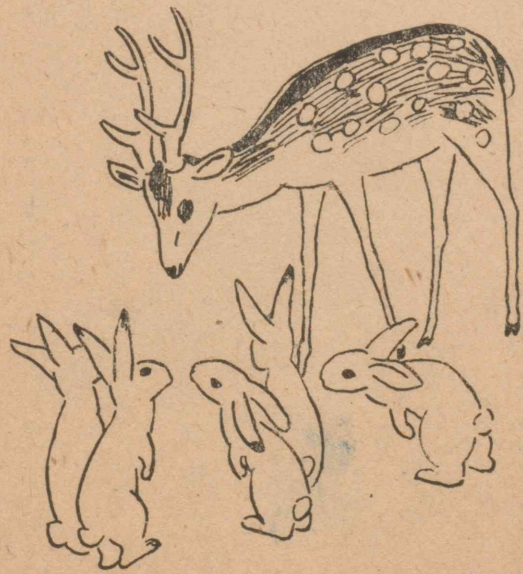
「どん。」といおうとするど、う

さぎさんたちのまえに、大きな

しかさんがあらわれました。

「ほくも、かけっこのなかまに

いれてくれたまえ。」



「いいよ。おはいり。」

「決勝点は、どこ。」

「あの山のとっぺんさ。」

「あの山のとっぺんか。わかった。」

しかさんは、のっそりと立って、山の方をみあげました。

「なにかかけようじゃないか。」

「しかさん、ただ遊ぶんだよ。」

「ただ遊ぶんじゃない。おもしろくない。なにかかけよう。」

「なにもいらぬや。」

「勝ったものになにもないなんて話はない。どうだ、こうし

ては。」

しかさんは、もし自分が勝ったら、このしかの角で、うさぎさんたちをつきあげるといふのです。

「そのかわり、ぼくが負けたら、この角を、おってしまってもいい。」

うさぎさんたちは、こまってしまいました。どうせ、足の早いことにかけては、しかさんにかないません。そうすると、自分たちは、あの大きなするどい角で、つきあげられてしまわなければなりません。

しかさんに勝ったところで、あの角をおるなどということ、はできません。角をとったところで、なんになりましょう。ちっともいいことではないと、うさぎさんたちは話しあいました。

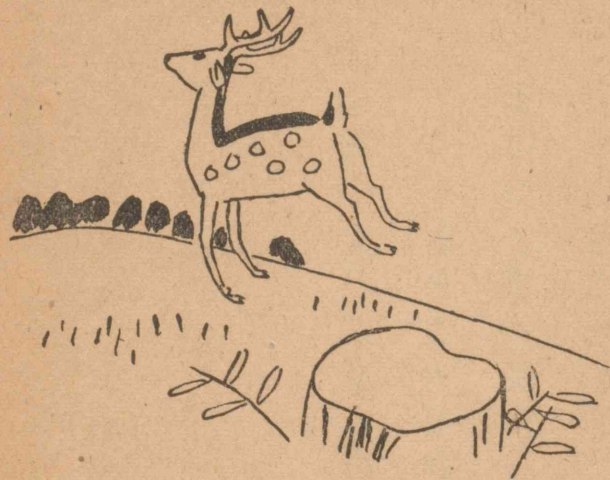
「さ、はじめよう。いいか。」

うさぎさんたちは、しかさんとならびました。しかさんは、

「ようい、どん。」

ど、元氣のいい声をかけました。五ひきのうさぎさんと、しかさんとは、風のように走りだしました。ささの中、やぶの中を、とんでいきます。

のぼりざかを走るのは、うさぎさんのもつともとくいとす



ところです。

しかさんも負けてはいません。角をふりたてふりたて走り
ました。ところが、ぶどうのつるに 角がひっかかりまし
た。

「なんだ、このぶどうのつるめ。」

しかさんがおこって走ると、こんどはたおれた木のみきに
トンとけつまずいて、すってんころりところげました。

「このくされ木めが。」

ぶんぶんおこりながら、びっこをひきひき、てっぺんにた
どりつきました。

そこには、もううさぎさんたちはいませんでした。

そうして、木の切りかぶに、つぎのようなことが、赤いク
レヨンで書いてありました。

「しかさん、私たちが勝ちましたよ。けれども、あなたの角
はおりません。うさぎたち。」

「なんだと、ひとをばかにしている。ようしゃはならない。」

角についてやる。」

しかさんは、うさぎさんたちのあとを、どんどん追いかけ
ました。

うさぎさんたちは、谷をわたり、みねを一つこえました。
長い森をくぐりました。そのうちに、しかさんは、いつのま
にかはぐれてしまいました。

やがて、うさぎさんたちは、大きな岩のところにてました。

「ああ、こわかった。」

「ここまできたら、もう安心だね。」

「よかった、よかった。」

五ひきのうさぎさんたちは、ここでゆっくり休むことになりました。ところが、この大きな岩のかけに、とらさんがねむっていたのです。

うさぎさんたちは、そのことをすこしも知りませんでした。とらさんは、晝ねをしていたのですが、うさぎさんたちがあ

まりガヤガヤ話をするので、目をさましてしまいました。

「いいごちそうができた。」

とらさんは、そつと首をのばして、うさぎさんたちの方をのぞきました。五ひきのうさぎさんたちは、あせをふいたり、ねころんだり、足をもんだりしていました。

とらさんは、いきなり、

「こら、うさぎども。」

と、われがねのような声をたてました。

うさぎさんは、びっくりきょうてん、みんな地面にぺたんとうつぶしてしまいました。

「いいところへきてくれた。おなかかぺこぺこなところだ。」

おいしい肉がたべられる。どれ、ごちそうになろうかな。
のそり、のそり、そばに歩いてきました。
うさぎさんたちは、もうにげようと思ってもにげることは
できません。

助けてくださいと、お願いしたところで、ゆるしてくれら
みこみもありません。

とらさんが手をのばして、一ぴきのうさぎさんのせなかを
おさえました。

うさぎさんたちは、いっしんになって、神さまにおいのり
をしました。
そのとき、

「こら、まて。」

という、それこそかみなりのような声がひびきました。それ
は、もう一ぴきのとらさんでした。

「おれがさきにうさぎをみつけたのだ。あの谷をわたるとき
に、ちゃんとみつけたのだ。そこから、あとをつけてきた
のだ。」

「おれが、いまたべようとしていたところだ。よこどりする
と、ゆるさないぞ。」

「なにを。」
「やるものか。」

一ぴきのとらさんが、いきなり、もう一ぴきのとらさんに

どびかかりました。

二ひきのとらさんが、つかみあいをはじめました。上になつたり、下になつたりしました。

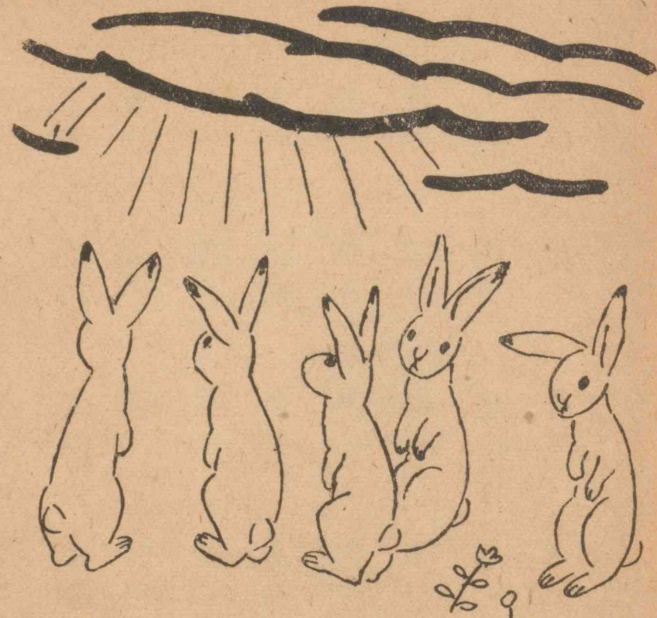
そのあいだに、うさぎさんたちは、手をつないで、そこをにげだしました。

どンドン、どンドンにげました。

山を、いくつもの、いくつものこえました。

谷川にそって、山のふもとにでてきました。

やっとしずかな広い野原にでました。野原には、日の光が
いっぱいさしています。クローバートの花が、まっ白にさいて
いました。おなかのすいた五ひきのうさぎさんは、だいすき



なクローバーをたべました。

みつばちさんがとんできて、

「うさぎさん、ここは、しずか

なところですよ。安心して、

ゆっくりおあがりなさい。」

と、うたいながらいいました。

五ひきのうさぎさんたちは、

みつばちさんのことばを、たい

へんありがたく思いました。

國語 第三学年 下
 Approved by Ministry of Education
 (Date May. 24. 1949)

昭和二十二年十一月二十五日 翻刻發行
 昭和二十三年八月三十日 修正翻刻發行
 昭和二十四年六月五日 修正翻刻印刷
 昭和二十四年六月三十日 修正翻刻發行
 (昭和二十四年五月二十四日 文部省檢定済)
 定價式拾式円八拾錢

著作權所有 文 部 省

翻刻發行 兼印刷者 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社
 代表者 長 得 一

印刷所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社堀船工場
 發行所 東京都北区堀船町一丁目八五七番地 東京書籍株式會社

決	首	飛	面	谷	集	晝	顏	助	鉄
(132)	(115)	(106)	(90)	(67)	(56)	(50)	(31)	(15)	(4)
勝	料	機	病	妹	相	遊	向	樂	計
(132)	(117)	(106)	(94)	(70)	(56)	(51)	(31)	(17)	(4)
負	實	勉	見	命	談	兩	根	會	台
(134)	(122)	(107)	(99)	(74)	(56)	(53)	(36)	(17)	(4)
岩	落	強	古	息	溫	聞	地	合	具
(138)	(122)	(107)	(99)	(76)	(61)	(56)	(36)	(18)	(5)
肉	深	以	望	問	度	來	森	唱	役
(140)	(126)	(113)	(100)	(78)	(61)	(56)	(40)	(18)	(6)
廣	性	鏡	同	銀	行	朝	隊	喜	
(126)	(113)	(100)	(79)	(63)	(56)	(43)	(18)	(10)	
毛	質	画	願	答	第	寒	夕	活	
(129)	(113)	(101)	(80)	(65)	(56)	(46)	(26)	(11)	
追	角	柱	神	題	号	繪	每	步	
(129)	(114)	(102)	(87)	(66)	(56)	(48)	(27)	(13)	

